

静岡市茶流通業史編集資料 2



座談会 静岡で活躍した外国茶商のこと

静岡茶商工業協同組合発行

はじめに



旧マッケンジー邸（静岡市高松）

静岡茶は、日本の重要輸出品として、戦前には大量に海外に輸出されていた。その最大の顧客は、現在では想像できないが、アメリカであった。とくに五大湖周辺都市や西海岸には日本茶のファンが多く、食堂では紅茶やコーヒーとならんでも緑茶も選択できた。ただし、飲み方は、砂糖やミルクを入れるというのが多かつたらしい。アメリカからは、色や香りについての厳しい評価が返ってくるので、それをバネに、日本緑茶の品質向上がはかられた。こうした輸出用の茶を大量に買いつけるために、たくさんの外国の商社が静岡市内に支店や出張所を開設した。そこには本国から駐在員が赴任し、彼らは静岡の人々と深く交わった。戦後静岡の名譽市民として親しまれたマッケンジー夫人の夫は、有力な茶商であるアウイン・ハリソンス・ホイットニー商会の中心人物であった。ちなみに、彼女が晩年を過ごした邸宅は、現在高松にあって静岡市が管理をしており、在りし日の姿をよく留めている。

茶流通史作成のために行つてゐる聞き取り調査第二回目となる今回、座談会では、静岡在住の外商に関する思い出を二人の方に語つて頂いた。内容的には昭和十年代が中心となる。

座談会

静岡で活躍した

外国茶商のこと

日 時・平成十一年十二月四日

参加者・有渡山重二さん（静岡市小鹿）
谷本勇さん（静岡市丸山町）
聞き手・中村羊一郎
立会い・加納昌彦
会場・ヘリヤ商会（静岡市北番町）

就職難の時代だった

中 村 有渡山さんのお生まれは。

有渡山 大正五年二月七日、静岡市の寺町

一丁目というところで生まれました。

有渡山 昭和六年にアウインハリソンズホ

イットニー商会へ入つてからです。

中 村 どういう身分で入られたんですか。

有渡山 身分は見習いというような感じで

すね。

中 村 きつかけは何でしょう。

が、学校から電話がありまして、北番町のお茶の貿易の商社で人を欲しいから、内田さんという人を訪ねて行つたらどうかと。そう言われたもんですから内田さんを訪ねて、招魂社の裏の会社へ行つたわけです。

有渡山 当時、昭和六年はなかなか就職難外人のバイヤーとか商社の方と、

静岡のお茶屋さんとがどういう関係にあつたのか。それからどんな手段取りでお茶が買い付けられて輸出をされていたのか。その辺の話

中 村 きょうは、特に戦前のお茶の輸出のことについて、特にこの静岡で

外人のバイヤーとか商社の方と、



有渡山 会社はその招魂社のすぐ北側にありました。それで、その日に内田

さんを訪ねて行きましたら、マッケンジー夫妻に紹介するからって。

そこでちょっと話ををして、OKだから今から来るようにと、そう言われたもんですから、一遍家へ帰つて昼飯を食べて出かけたのです。

学校のほうの桜井先生には、こういうわけで今から来いって言うもんですから行きますからと、話をしておきました。そうしたらもうその日から夜の八時ごろまでずっと仕事で、みんないろいろ、この人はこういう係の人だつていうことを紹介されて、一日大体それで終わつたわけですがね。

中 村 学校とおっしゃるのはどこの学校ですか。

有渡山 私は駿府商業。静商と合併になりましたけどね。駿府商業の出。

中 村 じゃ駿府商業卒業して、就職がな

いということだったなんですか。

有渡山 ええ。卒業して、思うようなところ

がね。友人たちとは当時は本屋さんへ就職したり、それから田中屋百貨店ね。今の田中屋というと違いますけど、そこへ就職をしたりしてましたんですけどね。僕は別に、特に就職の必要はなかつたんです

けどね。

中 村 お宅のお仕事は何をしてたんですか。

か。お父さんは。

中 村 うちは横浜の貿易商社の下請で、向こうからハンカチ生地を送つてきて、それに加工したり何かしてましたね。

有渡山 そうするとお茶には全然関係なかつたんですか。

中 村 関係はないですけれども、私の兄さんが私と十才違うんですけどね。

どういう関係か知らんが、ヘリヤ商会へ就職をしたです。そうして二十一、二で死んだんですけど、特にそれとは関係ないですけどね。

中 村 私はお茶の会社とは全然関係ないです。

これからハンカチの話から言えば、

外国人の人とのつきあいといふのは別に何の違和感もないわけですよ

ね。

有渡山 ええ。ですから、私の兄さんの友達でヘリヤさんの方で大勢知つて

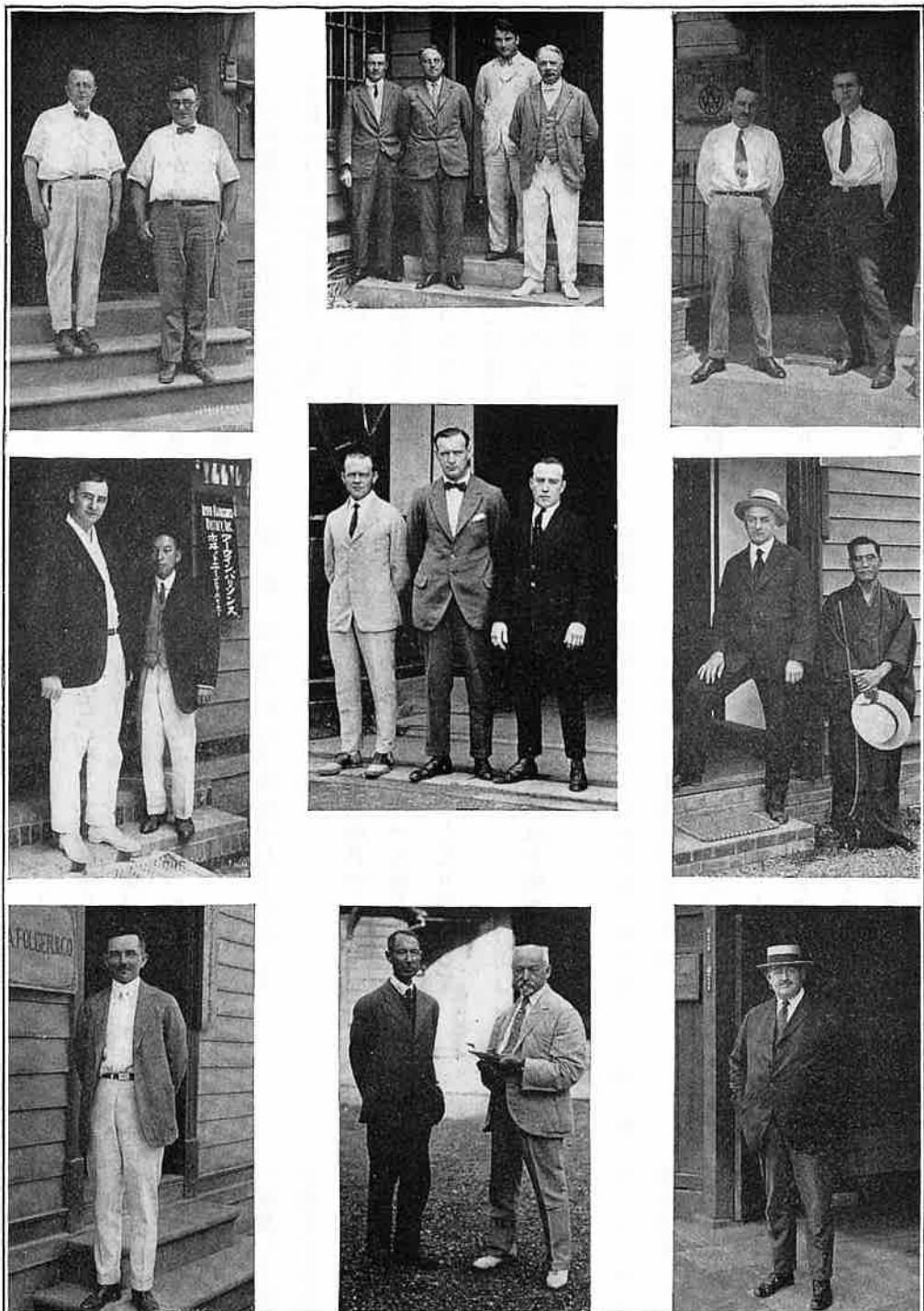
る人がいましてね、私がアウインへ就職してからも、いろんなことで教えてもらつたりして。学校の二年ぐらい上の先輩が二人、ヘリヤに就職していました。それですからその衆と一緒に遊んだり何かして。そんな具合で、別に外国商社だからといって特に抵抗はなかつたんですけどね。

中 村 今、マッケンジー夫妻というお名前が出ましたけれども、マッケンジーさんがこの会社の経営者ということですか。

有渡山 本社がアメリカにあります、静岡はお茶の買い付けの商社だったことです。

中 村 ということは、会社の仕組みでい

うと、支店とは違うんですか。



SOME AMERICAN TEA BUYERS AT SHIZUOKA IN 1924

Left to right: Top row—W. H. and John Seigfried of Siegfried & Co.; P. E. Bousfield, A. T. Hellyer, Frederick Hellyer, and C. H. Lightfoot of Hellyer & Co.; the late J. F. Oglevee and Paul Ahrens of Irwin-Harrisons-Whitney, Inc. Middle row—D. J. Mackenzie and associate of Irwin-Harrisons-Whitney, Inc.; J. H. Peterson, W. L. Harrington, and C. Kunkel of Carter, Macy & Co.; the late John Becker and associate of M. J. Brandenstein & Co. Bottom row—A. C. Walliser of J. A. Folger & Co.; A. V. C. Maher and the late Otis A. Poole of the Otis A. Poole Co.; the late N. Gottlieb.

有渡山 支店だと思うんですね。本店がシカゴ。

中村 そうすると、アメリカにある本社の名前は。

有渡山 アウイン・ハリソンス・ホイットニー・イン・インコールド。

中村 それが正式の名前。静岡でもそういう名前を名乗っていたんですね。

有渡山 そういうことです。マッケンジーさんはその支店長っていうですかね。昭和十年ごろかね、取締役になつたですね。

中村 じゃ、それまでは本社の経営陣ではなかつたけれども、静岡あたりの買い付けの責任者としていたわけですね。

有渡山 責任を全部任されていましたね。

ですから支配人というような格好ですね。それで重役になつて、前

から権限は自分に全部任されておつたですけれどもね。格が上がつたって言うか、結局成績が良かつたっていうわけじゃないですかね。

中村 そうすると、そのころの会社の名

前長いもんですから、これからのお話の中ではホイットニーと言つちゃいますけれども。

有渡山 あのね、アウイン商会と言う人もあるし、ホイットニー商会と言う人も。

中村 同じなんですね。

有渡山 ええ。ということは、『日本茶輸出百年史』に、マッケンジーさんが大正七年に初めて静岡へ来たと、

アウイン・ハリソン・ホイットニー商会のお茶の買い付けの主任として來たというようなことが書いてあります（四三一頁）けれどね。それはアウイン・ハリソンス・ホイットニーでなくてね。アウイン・ハリソンスクロス・フューリードのお茶の買

い付け。

中村 じゃ、百年史のほうはちょっと正確じやなかつたということですか。

有渡山 そのところがちょっとね。ですかね、昔から編集した人がクロス・フューリードということを知らなかつたじゃないかと思いますけれどね。それで、

アウイン・ハリソン・スクロス・フューリードの主任としてこちらへ来て、それから大正の末にJ.C.ホイットニー商会を吸収合併して、それで

アウイン・ハリソンス・ホイットニー商会というよくなつたんですね。

中村 じゃ名前を二つくつつけて非常に長い会社名になつたんですね。

有渡山 ですから、クロス・フューリードが取れてホイットニー、アウイン・ハリソンス・ホイットニー・商会、それですかね昔からの人はアウイン商会って言つたり、ホイットニー・商会と言つたりしていたわけですね。

マッケンジーさんによる

輸出茶の仕入れ方

中村 なるほど。その当時、有渡山さんが就職をされたころ、この会社には外人さんはそのご夫妻二人だけ

だつたんですか。

有渡山 マッケンジー夫妻と、それからP・

D・アーレンスとか。それはアメリカ人ですがね。それからマーヤさんという人がいましたね。

中村 マーヤさんは男性ですか。

有渡山 マーヤさんは男性で、ポルトガルと中国のハーフの人ですね。外

人でおつたのがそういう人ですね。

中村 このアーレンスという方は、仕事の内容は何ですか。

有渡山 内容は、主にマッケンジーさんは

パンファイヤードとかブラックグリ

リ、黒グリですね。そういうのを

主に仕入れてたんですね。アーレンスさんはナチュラルリーフとバ

スケットファイアですね。

中村 ナチュラルリーフというのは、い

わゆるふつうの伸び茶ですか。

有渡山 そうです、日本の今の煎茶ですね。

あのスタイルですね。深蒸しとは違つて伸びてのですね。

中村 マーヤさんは何をするんですか。

有渡山 マーヤさんは事務的なことですね。

仕入れは、アーレンスさんがバスケットファイヤードとナチュラル

リーフですね。それからマッケンジーさんの奥さんがニブス。ニブ

スつていうのはガンパウダーみた
いにこぎまるかつて。ニブスとシフティングをマッケンジーさん
の奥さんがやつた。

中村 ニブスというのは、グリ茶とはま

た違うんですけど、グリといふとあ

れですけど、グリといふか、芽茶の丸くなつたやつです。まあガン

パウダーですね。グリで言うとガ

ンパウダーです。丸っこいやつです。

中村 それからシフティングといふは。

シフティングは粉茶ですね。

中村 これはね、参考までにガンパウダ

ーですけどもね。ニブスといった

のは、このみるい葉っぱのうんと

小さいのがまんまるくなつたもの

ですよ。

中村 もつと丸くなつちやうんですか。

有渡山 もっとまん丸いやつです。小ちゃ

中村 一つの芽ごとにまん丸くなつちゃうんですか。

谷本 そういうことです。だからこれの

小さいもんと考えればいいですよ。

中村 これは要するに、火薬に似てるつ

ていうんですか。

谷本 そのとおりです。ガンパウダーね。

日本語で言えば玉緑茶です、これ

ね。釜煎りの玉緑茶です。

有渡山 ガンパウダーの一番みる芽でない

とあんまりニブスつていうのはで

きないね。

中村 ガンパウダーの一一番みる芽とい
うと値段は高いわけですか。

有渡山 高いですね。数量がたくさん採れ

ないですよ。

中村 そうすると、この会社の外人さん

たちは、それぞれ自分が得意とす

るお茶の種類といふか、役割を持

つてたわけなんですね。

有渡山 そうです。

中村 このタイプはこの人がやると。

有渡山 全部マッケンジーさんが最終的に

は見ますけどね。マッケンジーさ



有渡山重二さん

から給料をもらつてゐるんぢやなくて。

有渡山 会社じゃなくて、あつせん手数料

を荷主からもらうわけです、アウインの場合はね。

そうすると、この方は一応専属の才取りなんだけれども、収入は荷主から得るという、なかなかおもしろい形なんですね。

有渡山 その人は半場さんていう人だけ

ね。その下にあいちゃん、あいちやんと言つてた若い衆が一人いてね。それで朝、荒茶を仕入れるときなんか、五時ごろからずつと見て夕方までやるもんですから、特に会社でボーナスみたいにその人には払つたわけですね。だから荷主からもらうブローカーの分と、

有渡山 それから会社側からある程度ボーナスをもらつて。ですからうちの社員よりはよく働いて。

中 村 じゃ評価は全然しないんですね。

有渡山 しないです。

中 村 そうすると、逆に言えばその荷主

有渡山 というのはたくさんいますよね。半場さんはどの荷主にうちに来な

するんですか。

有渡山 お茶の仕入れのときの審査の手伝いですね。

中 村 じゃ、等級をはつきり見きわめるような仕事は、マッケンジーさんが最後にやる。

有渡山 ですから、拝見場の人たちが拝見して、これは具合悪いっていうことになればもう見ないわけですね。

中 村 つまり拝見場のこの仕事の人と、

その半場さんていう才取りさんは、具体的なお茶の品質を見る役目をしていたんですね。

有渡山 いや、その半場さんていう人は、ただ斡旋ですから、お湯を沸かしたり、それから見本を持つてきたそのお茶を、拝見盆にのせてちゃんと拝見ができるように準備をする。

中 村 日本人は何人ぐらいいたんですか。

有渡山 日本人は拝見場に、六人くらいですね。それでほかにあつせん業者、つまり才取りの人が二人ぐらいですか。

中 村 これは、いわゆる居才取りという

か、居つきの才取りなんですね。

有渡山 そのとおりですね。ですけどね。

その人が荷主のほうから口銭を取るわけですね、あつせんだからね。

中 村 つまり、この二人の才取りは会社

有渡山 もう大体決まつちやつてるんです

中村 なるほど。

有渡山 ですか。

よ、出入りの者が。ほかの斡旋の人も来るですよ、会社へはね。来るけれども、世話をするのは全部

半場さんです。

中村 そうすると、分量はどのぐらい仕入れるかっていうことについても。

有渡山 それはわからないですね。

中村 いまいちよくわからないのは、その半場さんの役割なんですが、別にこの人はいなくても商売ができるんじゃないですか。

有渡山 それはできるです。できるけどね、拝見場のいろんなもの、朝たくさん出てくるでしょ。あとその準備

ですね。それからマッケンジーサンのほうで、これは幾らって値をつけるわけですよ。そうするとその値段を荷主と話をして、荷主がその値段でかかるとか、もうひとつ買つてもらいたいとか何とかつていう話になるんですよ。その値

段の折り合いを斡旋してるのであります。

有渡山 マッケンジーさんのほうは、これとこれは幾らで買うからと言つてあるから、半場さんが荷主にそれを言うわけですよ。それでOKならOK、いやいくらいくらもう少し買ってもらいたいなら、そのことをマッケンジーさんに話して、

中村 それじゃそれより上げてやるからつていうような、その仲立ちですね。いわゆるプローカー。そうすると半場さんの立場自体が微妙で、マッケンジーさんに良くしようと思えば安く買いたいし、手数料のことを考えれば高く買つてもらいたいという。何か微妙な立場ですね。

有渡山 それでも会社へついてるわけですね。会社でもつてお茶を買わなきや、その人もやつていけない。みんなが拝見しやすいように下準備するのが主な仕事ですね。

中村 言葉はどうしてたんですか。マッケンジーサンは日本語わかつたん

有渡山 日本語はある程度わかつたですね、親父さんはね。それに大体もうわかつてるわけですよ、お茶の値段のことですからね。

中村 例えば、どんな会話があるんですか。

有渡山 私は拝見場じやないもんだから、はつきりしたことはよくわからぬとか、それからこれは粉が多い

ほうがいいとか、小さいほうがいいとか、それからこれは粉が多いから、裾（粉などの混入物をさす。裾物といえど下級茶のこと）が汚いからきれいにしろとかつていう、そういう具合ですよね。それで水色を見て、水色の悪いのは、これは水色が悪いから直してこい。そ

うすると、また荷主のほうは合組みを変えて、いい水色のと混せたりして、それからまた再見本出したりして。

中村 その再見本を出すというのは、自分の手持ちのものを組み合わせる

んですか、それともまた出直してくるんですか。

有渡山 もう、すぐスッて行くんです。

その荷主っていうのはどこから来るんですか。主として。



マッケンジー夫妻を囲んで マッケンジー邸（西草深町）
前列左 マーヤ夫人、前列右 キャシディー氏夫人
後列左よりマーヤ、チンマリン氏、アーレンス
昭和8年頃撮影（有渡山重二さん所蔵）

中 村 じゃその荷主が自分のお茶を担い

そうですね。荒茶の場合があつせ

んの人が朝集めてくるんですけどね。仕上げのものは全部自分のと

この会社の社員が見本を持つてく

それにてて、洋画の一番の秀才、一
ね。それで、荒茶の場合はほうほ

うで競合するから、早
うようすに才取りの人が

静岡駅から自転車競走やつて茶町まで走つたつていいますからね。

自転車に乗つてこられて、自分の

目的のヘリヤさんは行く人はヘリ

イン、シーグフリードへ来る人は
シーグフリードって、自分の本命

のとこへ向かつて来るですね。だ

けど仕上げの場合はそういう競争はないですね。

今の半場さんたちが扱つてたのは
一応仕上げた茶だつたんですか。

有渡山 いや荒茶が多いです

中 村 ところで、今言つた拝見場に六人

それから才取りさんが一人、あと
どんな役目の方がどのぐらいいた
んですか。

輸出茶の包装

有渡山 拝見場のほうはそれで全部ですね。

それから事務所は大体お茶の輸出する仕事と、それから茶代金を支

二二。 払う仕事ですね。それが主だった

中村 それは何人ぐらい

有渡山 それは輸出の専業のが三人ですね。

それから保険の係の人が一人いて、

それから暮代金の支払いが一人して、それから工場係というのが、

これは工場の工員の人の賃金の支

いうんですか、社会保険のような

こととか、労働関係の仕事、つまり労務管理ですね。それが一人い

て、それからもう一人の人が帳簿

を専門につけていました。

中 村 これが事務系の人たち。

有渡山 それは、事務所が二階建てだったた

ものですからね、その人たちは、

一階にいたですね。それにもう一

人支配人がいました。長島さん。

マッケンジーさんに言わせると、

あれは支配人じやねえ番頭だなん

て言つてたけど、日本人のヘッド

の人で長島さんという人がいて、

それが下の事務所にて、二階は

内田さんという人と関谷さんとい

う人と私といたですね。それが袋

詰めのカートンの印刷関係の仕事

をしておつたですね。

中 村 そうすると有渡山さんもその仕事

をしてた。

有渡山 ええ、私は小僧で入つて、それか

ら二年ぐらい、いろんなことを見

習いをして、それからサンブルの

仕事をやつたわけですよ、外国へ

出しほ。サンブルというのは、今

は航空便やいろんなもんで出せる

けど、昔は船便だけですよ。それ

ですから、船がプレジデント何とかとか、エンプレス何とかとかいろいろな船があるけど、そのアメリカ向けに出る船へ郵便でそれに間に合うように出すわけですね。だからシッピング・サンブルも、それから普通のサンブルも、それ

がかなりの数量が出るわけですよ、缶でね。二分の一ポンド（一ポンド＝四五三・六g）、あるいは四分の一ポンドの缶でね。

中 村 二分の一ポンドといえば約二三〇

g。

有渡山 ええ。それがシッピング・サンブルももういろんなもんがあるから、それをメールでやつてたですからね、手紙を出す。その船へ手紙を出すもんですからね。その手紙と一緒にサンブルを出すわけ。それがそれだけで仕事になるですね。

中 村 有渡山さんといふ人がエキスパート

にしてね、みんな高田さんのところ

へ仕事がわかんないと聞きに来る

んですよ、よその会社の人も。

中 村 高田さんという方がその輸出関係

の専門家。それから保険係の方が一人、それからお茶代金の支払い

をする人が一人、それから工場の労務管理等をしている人が一人に、

帳簿をつけてる方が一人というこ

とですね、大体ね。それからあと

けどね、そういう仕事と、それからカートンとか蘭字を印刷屋へ注文する、それのことについては、内田さんが一番の親方ですね。

中 村 そうすると、会社の社員で事務系の人はそれで全部ですか。

有渡山 そうですね。

中 村 ちょっと復習ですけれども、マッケンジー夫妻がゼネラルマネージャーみたいな感じでいて、その下に日本人のヘッドとして長島さんがいる。それから輸出関係の仕事に従事している専門の方が三人。

中 村 高田さんといふ人がエキスパートとしてね、みんな高田さんのところへ仕事がわかんないと聞きに来るんですよ、よその会社の人も。

中 村 高田さんといふ人がその輸出関係の専門家。それから保険係の方が一人、それからお茶代金の支払いをする人が一人、それから工場の労務管理等をしている人が一人に、帳簿をつけてる方が一人というこ

拝見場に六人、それから才取りさんが二人と。これとは別に再製工場があつたんですか。

工場のほうには荷受けする人で中国人のテイシユウフン。

有渡山 中村 中国人の方なんですか。

有渡山 ええ、テイシユウフンていう名ですが、普通は、アチュウ、アチュウていうんですけどね。

中村 どういう字ですか。

有渡山 アチュウっていうのはローマ字でアチュウと書くんです。テイシユウは鄭集芬。ティさん、ティさんって言つたりしてると、みんなアチュウさんて呼んでた。

中村 何ですか。

有渡山 サインをもう、アチュウと書くんですね。だからどういう関係かちよつとわからなかつたですがね。 そうですか、この方は日本語は達者なんですね。

有渡山 中国人だから完全な日本語じゃないですが、差し支えないわけですね。

中村 中国のどこの出身だつて言つてしましました。

有渡山 それはちょっとわからないですね。話はちょっとどりますけどね。

人、それから保険係だつた松永さんと、それから今アチュウさん、テイシユウフンですね。この三人は早くからブール商会というところにいたんです。そのブール商会がアウインハリソンスホイットニーに吸収されたわけです。だからこの三人はブールさんの系統です。

中村 いろいろな系統の人が集まつてゐるといつちゃ悪いけど会社が寄せ集めみたいなもんだから。

有渡山 ですから、主なのはアウインと、それからホイットニーと、それから小さいけどブールさんと。それからフォルジヤー商会というのが、それもアウインの傘下になつてるわけですね。後でまた説明しますけどね。それでね、アチュウさんはそのブール商会の人でね、荷が

入つてくるとそれへサインして見本を抜くわけですよ。

中村 抜き取り検査みたいなのをするわけですね。

有渡山 そうそう。それをアチュウさんというのが主にやつて、それでアチュウさんというのが都合が悪くていないときなんかはアーレンスさんがやつた。

中村 ナチュラルリーフが専門だつたつていう方ですね。

有渡山 アーレンスさんね、抜き取り検査のほうでした。

中村 そうすると、実際にはアチュウさんが現場監督みたいな感じで。

有渡山 それで入貫のほう、これは荷を受けるほうをさすんですが、アチュウさんが荷受けの主任だから目方計る貫々屋つて言つてたんですけどね、見本を抜き取つて、その目方を計つて正味がまわるかまわらなかつて、それで目方が少ないと、例えば昔のことですから五十匁（一匁

＝三・七五 g) とか百匁とかです
けどね、一つ目方が不足してると、

五十箱が五十箱分、全部減らされ
ちゃうわけですね。

中 村 そのときの目方を計るときのパッ
ケージは、大きさはどのぐらいな
んですか、また正規の目方は。
有渡山 あれはね、十六貫櫃（一貫＝三・
七五 kg) ていうですか。

中 村 いわゆる大海（だいかい）一本で
すか。

谷 本 違います。印籠（いんろう）ですよ。大海はあ
んまりない。昔は全部印籠です。

中 村 谷 本 いや、仕入れは貫で仕入れて、そ
れから輸出するときは全部ポンド
ですかね。袋詰めも何でも全部
今度はポンドで入れてるんですね。
谷 本 今でもアメリカはポンドですから。
中 村 そうすると、それはどの段階で変
わりますか。仕入れたときは変わ
んないでしょう、会社の帳簿は。
それでどこからポンドになるんで
すか。

有渡山 もう仕入れた時点でもうポンドで
す。

中 村 会社の中でポンドに変えますか。
有渡山 ええ、貫目で買う。最初の頃は斤
だった。

中 村 これは茶箱ですね。中が亜鉛貼り
になっている。

中 村 百六十匁でしたつけ。
谷 本 一斤（普通は六〇〇 g) ですね。

斤のあと貫になつて、それから日
本ではキログラムになつたわけで
すね。一番初めは斤で買ってたで
しょう。その次に貫になりますと、
それでもうすぐアメリカ向けの茶
はポンドに直したわけです。だか
ら我々全部換算表を持っておりま
してね。

中 村 有渡山 ヘリヤさんは仕入れも斤で仕入れ
たですね。
谷 本 ヘリヤは、同じ時代に。
有渡山 ええ、同じ時代に斤です。アワイ
ンはポンドですけどね。ポンドつ
ていうのは目方でね。

中 村 谷 本 貫目で仕入れてね。換算表がやつ
ぱり必要なんですね。

中 村 僕らの時代もう、昭和三〇年です
けど、この時代はもう貫で買って
ましたね。ヘリヤは。

有渡山 話は戻るけど、アチュウさんとい
うのが仕入れの荷受け係。それか
らお茶を合する、ブレンドする係、

それは岩崎さんという人が合組み、

ブレンドのほうは主任ですね。そ

れから望月さんという人が、岩崎

さんのアシスタントで。それから

建物は石蔵の三階建てでした。

中 村 石蔵だったんですか。

有渡山ええ、石蔵ですね。

谷 本 昔はみんな石蔵ですよね。

有渡山 アウイン商会には三階建ての石蔵

があつて、そこにエレベーターがあるわけですよ。それでエレベー

ターは何か認可がないと動かせない。

中 村 運転する人がいた。

有渡山 だから平岩さんという人がエレベ

ーターの係だった。

中 村 そのほかは。

有渡山 そのほかは、袋詰めの係がいた。

印刷所へいろんなお茶の袋の注文を出して、それが印刷ができてくると、それを会社で袋に仕立てたわけですよ。それにパラフィンで裏打ちして袋をつくったんです。

それから中袋にパラフィンの袋を

使つたこともある。ですから裏打ちすれば中袋使わないですね。

会社ではカートンとペーパーと言つたわけですよ。カートンといふのは、化粧品の箱があるでしょう。

ああいうスタイルのやつがカートンで、それからペーパーというの

は平らでフラットになつてるやつ

を折つて、それでお茶を詰めて上

下を貼つて出す。ですから箱型で

ないわけですね。

中 村 ペーパーというのは、筒型の袋で

すね。カートン、ペーパーそれぞれ

単位はどのくらいですか、目方

は。

中 村 半ポンドが多かったです。一ポンドのもありましたけどね。粉なら一ポンドかな。

有渡山 粉というのは、さつきのシフティ

ングつていうことですね。

中 村 そんなにいたんですけどね。

有渡山 ええ。まあそれはいろんな分担が

あるんですけどね。たとえばマグネットで不純物を取るというのを

栗田つていうのがやつてる。それ

から袋詰めの主任は望月という人

だつたです。

中 村 女工さん二百五十人というのは、

中 村 人だった。

要するにペーパーも箱にしなくちやいけないわけですもんね。

有渡山 そうです。それと栗田つていうのがいました。それからお茶にいろんな不純物が入つてゐるわけです

ね、ある程度ね。

中 村 茎とか何かとは別に。

有渡山 それはベルトコンベアで流して、金物はマグネットで吸い取つたり、

それから茎とかちょっとしたケバ

みたいの、ほうきのかすみみたい

ね。そういうものを取る。そのほ

うの仕事にはやっぱ女工さんが大

勢いてね。女工さんは全部で二百

五十人ばかりですけどね。

中 村 そんなにいたんですけどね。

有渡山 ええ。まあそれはいろんな分担が

あるんですけどね。たとえばマグ

ネットで不純物を取るというのを

栗田つていうのがやつてる。それ

から袋詰めの主任は望月という人

だつたです。

有渡山

石蔵の中で仕事をしてゐるんですか。



〈参考〉パッキング作業の様子。右方にバスケが見える。

(横浜開港資料館所蔵)

石蔵と、それから二階建てのトタンの作業所があつて、下が荷づくりなんかやることで、上が袋の仕立てとか、それからマグネットで取つたり、それから石蔵の三階で袋詰めをやつたわけですよ。

中村 有渡山

三階が袋詰め。二階が袋づくり。

棟が違いますけどね。トタンの二階建ての倉庫になつて、一階はバルクで詰める作業所になつてるんです。

バールクっていうのはバラで詰めることです。例えば、百ポンドとか八十ポンドとかを直に箱に入れて、

それで出荷するわけ。

谷本

中村 有渡山

巴ルクっていうのはバラで詰める

ことです。例えば、百ポンドとか八十ポンドとかを直に箱に入れて、

有渡山

中村 有渡山

三階が袋詰め。二階が袋づくり。

建たたやつですね。とはいえ、ホイットニー商会の

建たたやつですね。

そうすると、女工さんたちはそれ

ぞれ仕事を割り当てられてやるわ

けだけれども、再製の火入れつて

いうのもここでやつたんですか。

火入れはもうここではやらないん

ですか。

やらないですね。

中村

やらない。じゃ完全に出来上がり

たお茶をパッケージするというの

が主な仕事になるんですね。

谷本

中村

ハリヤは別ですよ。生葉を買って

荒茶をつくつて、再製もしました

から。

中村

じやハリヤは一種の一貫生産なん

だ。

谷本

じやハリヤは一種の一貫生産なん

だ。

有渡山

じやハリヤは一種の一貫生産なん

だ。

谷本

じやハリヤは一種の一貫生産なん

だ。

有渡山

じやハリヤは一種の一貫生産なん

だ。

谷本

じやハリヤは一種の一貫生産なん

だ。

有渡山

じやハリヤは一種の一貫生産なん

だ。

中村

じやハリヤは一種の一貫生産なん

だ。

黒グリヒソ連

有渡山

昭和九年ごろかな、荒茶を仕入れて、それをさつき名前が出ていた半場さんというのが出入りしたわけですがね。今までずっと仕上げ茶を仕入れてたのを、なぜ荒茶を仕入れたかっていうと、黒グリっていうのがあるんですよ。煎茶のちょっと細かくしたやつと、グリ茶のガラをかけない（すらないこと）黒いやつ。それを混ぜたのが黒グリっていうんですけどね。その黒グリの煎茶の部分ですね、それは前には仕上げを買ってたですよ、川根とか井川とか方々から仕上げを買っていただけれども、自分のところで荒茶を買って仕上げてそれを混ぜたほうがいいっていうことで。その黒グリだけにしか使わないです。

黒グリに移行するために仕入れたと。そうすると、その荒茶を再製するための機械もあわせて導入し

中村

有渡山 ある程度の工場も、つくったわけですね。

中村 そうしますと、ちょっと話は飛びますけど

有渡山 も、いわゆる静岡のたちはグリ茶は飲みませんよね。ということは、どういう人がこのグリ茶を生産したんですね

中村 か、業者というか。ロシアの人がグリ茶を買ったんですよ。（右表および巻末の注参照）

谷本

有渡山 グリですか、黒グリですか。黒グリは私の知る限り、ヘリヤで言いますと、お客様はサラダ商会っていう会社です。本社はカナダのモントリオールですね、そこが特注でしたね。もちろん、サラダ商会はボストンにも支店はありましたし、アメリカのあちこちにありました

有渡山

有渡山 それはまあ内地向けにも注文があるからつくったわけですね。グリ茶ついても、いわゆるロシア

日本茶の対ソ輸出量および輸出額
寺本益英『戦前期 日本茶業史研究』P240より
(単位:トン、千円)

| 年次 | 数量 | 金額 |
|----------------|---------|-------|
| 1925(昭和 14) 年 | 135.4 | 277 |
| 1926(昭和元) | 181.7 | 304 |
| 1927(昭和 2) | 457.3 | 629 |
| 1928(昭和 3) | 649.5 | 804 |
| 1929(昭和 4) | 1,502.5 | 2,017 |
| 1930(昭和 5) | 934.4 | 916 |
| 1931(昭和 6) | 2,170.1 | 1,868 |
| 1932(昭和 7) | 2,617.3 | 1,331 |
| 1933(昭和 8) | 108.7 | 53 |
| 1934(昭和 9) | 2.8 | 4 |
| 1935(昭和 10) | 5,662.4 | 2,981 |
| 1936(昭和 11) | 2,808.8 | 1,950 |
| 1937(昭和 12) | 2,705.0 | 2,651 |
| 1938(昭和 13) | — | — |
| 1939(昭和 14) | — | — |
| 1940(昭和 15) | — | — |
| 1941(昭和 16) | — | — |

中 村 今、伊東市でグリ茶をやつてます

ね。イメージとしてはあんなもん
でしようか。

有渡山

伊東でやつてるグリ茶つていうの
見たことない。

中 村

一見釜煎りみたいだけど、グリ茶
つていうのは基本的には蒸して、
伸ばさないものでしよう。

有渡山

そうですね。蒸し茶ですね。
中 村 蒸してどうするんですか、そのあ
と釜で炒るんですか。

有渡山

釜は使わないですよ。名前は釜つ
ていうけど。

中 村

じゃどうやつてああいうふうにま
るまつてくるんですか。

有渡山

あれは製造する荒茶のとき、精揉
機へかけないです。

中 村

それだけの話ですか。

谷 本

あの釜茶つていうのは、ずっと戦
後でもパンファイヤードといつて
釜煎りで出してたわけです、名前
は。ただし、それはこちらで製品

有渡山 それでサラダ、今谷本さんがサラ
ダつていうのは、割合注文よこす

ったわけですね。それは釜で再び
再火したわけですよ。ということ
で釜茶なんですよ。日本は基本的

には蒸し茶が多いんですね。

中 村 じゃ蒸し茶でつくつても、輸出直

前の再製のときに釜で煎つちやう

もんで結局釜煎りに似た意味もで

るんでしょうか。

谷 本 もうひとつこちらと違うのは、必
ずガラといいまして、つまりポリ

ツシユしたわけです。

中 村 つや出しをする。

谷 本 つや出しをすると葉っぱの余計な
ものが取れたり、すれたりして白

くなるわけです。

もちがいいわけですね。ほんと
の釜煎り茶とおんなじような製品

になつたときに、白っぽいような
色になるわけですよ。

有渡山 黒グリはガラ全然かけないです。

谷 本 そこが違うのね。もうガラ持つて
るところないね。

ですよ。そうするとワインでも
つて、例えば十万ポンド、アワイ
ンが注文受けると、ヘリヤさんへ
は一万ポンド行くだね。それで。

中 村 大体アウインのお客ですから。

有渡山 それでサラダ商会の向こうの茶の
仕入れる係の人がチェックするわ

けですよ。品質を。だからアウイ
ンが注文があると必ずヘリヤさん

に注文があつた。

谷 本 やつぱりバイヤーでアウインさん

のほうのバイヤーと、ヘリヤはヘ
リヤのほうのバイヤーとがみんな
違うわけです。でもお互いにみん
な両方から買うんです。これはも

うイギリス系の原則としてね。

中 村 なぜですか。

谷 本 コンペティションを大事にするん

です。つまり、値段は違つたら違
つたまんま買うんですよ。もつと

大きく言いますと日本からだけ仕
入れるんじやなくて、おんなじも
のを中国からも仕入れるというふ
うな、つまり複数の国から入れる

輸出関係茶語彙集

静岡県茶業会議所編『新茶業全書』(昭和55年版による)

バスケット・ファイア (Basket-Fired)

針状に作った茶をバスケット(通称バスケ)で火入れをした茶で、籠茶ともいう。今日では棚乾燥機を使用する。

パン・ファイア (Pan-Fired)

釜茶のことと、煎茶を鋳鉄製の平釜で火入れをしたもの。主としてアメリカ向け。九州などで生産されている釜炒り茶とは別。

ガン・パウダー (Gan Powder)

黒色で文字通り火薬に似る。珠茶ともいう。中国で製造される若芽を丸薬状に作った茶。日本では玉緑茶の中から選別し、この名称で輸出した。

グリ茶

玉緑茶の別名で、形が丸まっており、香味は煎茶と大差ないが苦渋味を嫌う。黒グリというのと、摩擦をおこなわざ原色を保った玉緑茶のことと主としてカナダに輸出された。

ニブス (Nibs)

煎茶中に含まれた小玉状になった茶で、ガン・パウダーに似ている。

ナチュラル・リーフ (Natural Leaf)

アイノ茶(Aino-cha)ともいう。国内向けの煎茶に似た仕上げだが、普通は摩擦をしない。北アメリカ向けのもつとも標準的な形態。

シフティング (Sifting)

仕上げ加工で60番篩上、30番篩下となった粉茶のこと。

中 村
平釜だったですか。

有渡山 有名前はパンファイアードという名前が残つてゐるけどね。実際は釜では火入れしないわけですよ。もつとも、ずっと前には釜で火入れしてましたけど。ですから戦前にはアウインのすぐ道を隔てた向こうに吉川合名会社の北工場というのがあつたですよ。そこはレンガでちゃんと積んだ釜場つていうのがあつて、実際には私ら知つてるときはもう使わなかつたけど。ちょうど焼き芋の釜みたいな。

谷 本 中 村 そうですね。そうすると、今の日本が石油をいろんなところから買つてゐるのと同じようなもんなんですね。

中 村 そうです。
谷 本 そうですね。以前はパンファイアードといふ名前が残つてゐるけどね。実際は釜では火入れしないわけですよ。もつとも、ずっと前には釜で火入れしてましたけど。ですから戦前にはアウインのすぐ道を隔てた向こうに吉川合名会社の北工場というのがあつたですよ。そこはレンガでちゃんと積んだ釜場つていうのがあつて、実際には私ら知つてるときはもう使わなかつたけど。ちょうど焼き芋の釜みたいな。

有渡山 ええ。それで、こういう何かしやもじの大きいのを入れて。
中 村 それは全部機械で動くようになつてたんですか、それとも人間が手で。
有渡山 機械でやるようになつてたんでしょ。実際には使わなかつたね。
中 村 知つてるときは、釜で火入れしたときのことは知りません。ちゃんとレンガで囲つてあつたですよ。
中 村 それに対して、いわゆるバスケットファイアードというのは籠でやるわけですよね。釜煎りとバスケットファイアードじゃ、あとの香りとか何かが違つてしまちゃうんですね。
谷 本 やっぱ釜のほうが火の香が強いわけですね。
中 村 なかなかバスケはいいものでしたね。
有渡山 ちょっと話、横に行つちやうんですけど、そのいわゆるバスケの場合ですね。僕がイメージするのは籠を伏せたような感じで、単純な

もので言えば下に炭か何かおこして。

谷本 そのとおりですね。

中村 そうすると、昔はあの上に再製茶を乗つけて乾燥させたっていうことですか。

谷本 籠はまだ持つてるところがありますよ。

有渡山 試験場にはないかね。

中村 茶業試験場にはありますね。ちょっとこれは別の話ですけど、宮崎の山のほうに調査で行きましたら、

自分の家の番茶を、番茶って言つてもかなりいいお茶を、まさにバスケを使って乾燥してゐる家がありましたね。

谷本 マルトウはまだ持つてますな。富士製茶も一つぐらいある。ガラもあるかな。それからバスケは沼津の何とかっていう人が持つてますな。

中村 ということは昔はそういうのは何十つてダーツと並べて作業したんですね。



平田寺境内に建つヘリヤ商会の石碑
(相良町)

谷本 藤枝が多かつたな、かつては。山万なんていうのは、八木さんてところがあつたけど、やつてないで

しょうけどね。

平たく言うと、再製屋というか、そこで使ってたんです。元静岡県

茶商工業協同組合の理事長だったマルトウ、一言善次郎さん、今

理事長鈴木正巳さん、丸七鈴木商店の。こういう会社は全部輸出屋の下請ですよ。輸出再製です。

中村 ちょっと話は別になるんですけど、おもしろいなと思ったのは、相良の平田寺に、ヘリヤさんの英文の石碑がありますよね。それは何か

相良の今村さんでいいましたつけ

輸出を支えた人々

中村 先ほど、アーウィンでいろいろ印刷屋に頼んで袋用の紙を仕入れたつていつてましたけれども、現物は残つてるんですか。

有渡山 それがね、どこかもう、現物一枚ぐらいはないですかね。

か、その関係でそういうものができたと。（解説参照）

谷本 そうですね。しかし、平たく言うとずっとその明治の時代から特にいいお茶として、エクストラチョイセスト川根というブランドで、川根の茶を出してたんですよ。つまり特選川根茶っていうんですかね。そういうブランドでは非常に細かいパッケージにして、半ポンドですかね。これはなかなかいいお茶でした。あれは確かに伸びたナチュラルリーフですね。

有渡山 戦災で全部焼けちやつたから。

谷本 みんな焼けてるんですよ。

中村 残念だな。

有渡山 だから今焼け残ったとこでそういうのを持つてる人があればいい

けど、もうそいつた資料がほとんどないですよね。

中村 そういうパッケージで言いますと、

すぐに例の蘭字（輸出茶の箱に貼ったラベル）を思い出すんですけども、もつと単純化された印刷なんですか。それとやっぱりきれいな絵か何かあつたんですか、袋には。

有渡山 袋にありました。

中村 お茶を詰めた半ポンド用の袋とか

カートンに貼つたんですね。

有渡山 オフセット刷りですね。蘭字は手で刷るんです。薄い腰の強い紙ですね。

中村 この時代になればもちろん手刷りのものなんかないんでしようけれども、デザインとしては結構華やかなものがあつたんですか。

有渡山 いいもんがあつたですね。あれを

焼いちやつたっていうのが残念だな。

中村 お茶屋さんの組合で呼びかけても

もう出できませんかね。

有渡山 アウインで戦後あつたんですよ、たくさんこのぐらいの蘭字のファ

イルの見本帳が三冊ぐらいあつた

んだけど、焼いちやつたんですよ。

あれもつたないことしただけよね。

中村 逆に言えば、当時日本から仕入れていたアメリカとかカナダの会社

のほうにそういうのないのかしら。

これは一つ課題ですね。何とかそ

ういう証拠が欲しいな。

有渡山 アンペラでつくつた荷づくりのは、試験場にあるんですか。

谷本 アンペラは輸入してたよね。シャンハイから。

中村 そうですか。

谷本 今ロイヤルホテルあるでしょう。昔何てつたつけ。

有渡山 ロイヤルホテルの向かいのお湯屋があつたよね。そう、鈴木さんと

いうお湯屋さん。そこにホウさん

という人が下宿していて、このホウさんがヘリヤさんのすぐ向かい

側にいたチンボウチという中国人と一緒にアンペラの輸入をしてい

た。このふたりが中国から輸入し

て商社へ納めてたんです。

中村 どういう字ですか。

有渡山 チンは陳。

中村 ホウは宝？

谷本 知らないな。ま、チンさんとホウさんだね。

中村 やっぱりそういうところまで調べないと。

谷本 一大産業ですよ。例えば戦後は主に木箱からベニア箱にベネスタチエストといいますが、これをやつてたんですよ。その中にベニアの、そうそう、内側はアルミみたいな箱を貼つたやつね。それ内袋になつてまして、その外側にマークを書いた。マークは鉄に字を彫つて、それを刷つたわけですよ。

これをマーク屋はドウミノがやつ

た。ドウミノが横浜から連れてきたんだから。

有渡山 マークをタガネで打つてから、ブラシでやる。墨を溶いた黒いのを割合毛のこわいブラシでつける。

谷本 ブラシというのは靴の磨くブラシみたいなやつだ。

中村 それも戦前のことですか。

有渡山 戰前ですよ。

谷本 だから、今はいいけれども浜田木材なんていうベニア屋ができただけだ。当時はベニアたくさん輸出してましたから、日本からね。栗田貿易なんか主な商品がベニアの輸出でしたから。あと缶詰もそうでしたね。

中村 なかなかこの裾野が広いですね。

中国人の方がこんなふうに活躍してるのは思わなかつたもの。

有渡山 あのね、包装のスタイルが中国を真似てるわけですよ。それで木箱へアンペラ、その中がアウインの

場合は鉛の箔へ和紙の裏打ちをした袋を作り、その中へもう一枚紙の

中村

袋を入れて外はアンペラでくるむ。それは重量はどのぐらいのパッケージですか。

有渡山 大体パンファイアードが八十ポンドですね。それから、バスケが七十ポンドぐらいかな。

中村 そうすると、先ほどの二分の一pondのパッケージっていうのは。

谷本 それは違う。それはまたそれ二分の一pondを何個というふうに一つの大きな箱に詰め込んだんです。

有渡山 袋詰めの場合は袋でもつて寸法が変わっちゃうんですよ。だからその袋に合わせて、八十ポンドなら八十ポンド入るような箱をつくるわけですね。

中村 うん、それでまた味が良くなったりして。（笑）

有渡山 合場の枠にお茶をあけて平らにならすんですが、そのときに履く合下駄っていうのがあるんですよ。

谷本 合下駄はおもしろい。平らな下駄ですね。

有渡山 普通の板つぺらへ鼻緒がすがつてやつです。それをはいて。これ

谷本 それから、合つていうのは合組み機なんていうのは最近の話で、昔はどうやってやつたかと、いうと、板をダーンと積み上げて枠を作るわけです。それで倉庫の角を使つてそこへ枠を立て、その中へがんがんがんがん、十六貫の茶を入れてく。ここから来た茶は一番下、次はことこと段々にして積んでいく。

そして合するときには板を全部外して、スキでこうやって混ぜたもんです。これのほうがよっぽど今

の合組み機よりよく混ざる。それだけは確かだ。ただし暑いときには相当汗もかいたけどね。

中村 うん、それでまた味が良くなったりして。（笑）

有渡山 合場の枠にお茶をあけて平らにならすんですが、そのときに履く合下駄っていうのがあるんですよ。

谷本 合下駄はおもしろい。平らな下駄ですね。

には歯がないですよ。フラットになつてゐる。

それでないとお茶の中へ沈んじやうでしょ。その合下駄つていうのははいて、囲つたお茶の山の上にのつて一段一段な

すわけです。

谷本 ならすときには、野球場なんかで

グランドをならすでしょ、あのトンボを使ってやつてた。僕が見てたころは。

中村 その合下駄つていうのは、麻機のほうで泥田に沈まないようにする、田下駄と同じようなものなんだ。

有渡山 合下駄といふのは実際に見た方は

あんまないでしょ。戦前です僕ら見たもん。

中村 合下駄ありませんかね、どっかに。

谷本 それこそ焼けちやつて、薪にしちやつたな。

中村 作つてといえどできるわけ。

有渡山 それは簡単だよね。

谷本 浜村屋のね、結構厚いよな、あれ。

このぐらいいの板に、穴を三つあけ

有渡山 普通の下駄の歯がないやつだ。

中村 普通の下駄を一足分合わせたくらいの面積の板に、鼻緒をすげるんです。

だからね、割合大きいですよ。小さいと沈んじやうから。沈まないためにはくだから。

中村 合下駄をはいてお茶の山に乗つて、木のトンボでならすのですか。

谷本 うん、トンボでならした後、初め囲つてた板を外して、四本の棒がついてるスキでかき出し、すいて混ぜるんです。

中村 つまり合場つていうのは、工場の片隅に一種の大きな箱みたいな形を作るんですね。

谷本 柱を建てて、それへ板を挟んでく。合が何貫になるかによつて大きさは変えるわけだよ、自由に。だからこの柱を建て替えて、大きな合になると十六坪ぐらいかな。五千キロぐらいいくからね。それへ上

てさ。

くわけ。どんなお茶を合するか、その割合をあらかじめ決めておいて、その比率どおりにお茶を枠の中に入れていく。例えば、マルトウさんのをまず最初に入れたら、

その次はだれのを入れるとか、同じ品種でもそれぞれの特徴や値段が違うわけですよ。そうして十軒なら十軒分を順番にならしながら積んでいく。それから板をはずしてかき出しながらしくわけね。それで、今度はすいたやつを貰々する（計量する）わけだよな。箕を使つて。

だから中にも人がいたし、箱づくりやつたら箱づくりをやる。入目の重い箱を担ぐほうが人工（にんく）は高いんだよ。一六貫なり一七貫を軽々と持てる人夫の方が稼ぎがよくなる。あんまり人間の大きさ関係ないよな。小さくても肩に瘤なんかできてね。もう毛が生えちゃつてるよな。

中村 相撲の雅山みたいなやつ。（笑）

谷本 そうそう。

中村 おもしろいですね、それは。
有渡山 合を組むときはサンプルにあわせて組むでしよう。それでできたら、いきなり板を全部取っちゃわないで一とこはずして試してみて、それでもとの見本と照らし合わせてOKということになれば、そこで本当に合を組むんだけどね。それもこれはまだちいと水色があんまよくなからつといって、それじやもう少しいい水色のやつを入れようとか。

谷本 いろいろある。それは要するに茶

方が決めるわけですよ。

中村 茶方っていうのはどういう人ですか。

谷本 買付人ですよ。拝見場にいる。合

組みの紙はどつかのあるんじゃない。まだあると思うんですけど。

中村 じゃ、最終的に茶の特性を一番うまく組み合わせて、良さそうなものにするのは、この茶方がその配分率を決めるんですね。

谷本 そうです。茶方はもう大変な権限がある。おかしいのは今、生一本

がいいっていうような人がいるけれども、ほとんど合によつてよし

あしが決まるわけですよ。だから、例えばあつちの茶はスタイルはす

ごくいいけれども味はまるでダメだとか、これは形は悪いけれども味はいいとか、そういう特徴をみんな持つてるわけです。それを結

局茶方の腕で、一番いいスタイルと、それから匂いと味というものが決まるんです。だから茶方はものすごい権威があつたですよ。

中村 そうすると、その段階でもうお茶は裁断ずみというか、大きさはもう全部揃えたのを仕入れてくるわけですね。

谷本 買付人ですよ。拝見場にいる。合

組みの紙はどつかのあるんじゃない。まだあると思うんですけど。

中村 じゃ、最終的に茶の特性を一番うまく組み合わせて、良さそうなものにするのは、この茶方がその配分率を決めるんですね。

て、そして合わせて、これでいいとか悪いとかって。大体まあ一発で合うだけね。

中村 そうすると、やつぱりそれはその年の各産地のお茶の性質とかの要素を十分勘案して組むわけだから、年ごとにいろんな組み合わせっていうのができるわけですね。

谷本 そのとおりです。だから今年の出来がいいとか悪いとかいつてもいろいろ違うわけで、当時はみんな産地によって特色がありましたから。ですから、茶方のほうは三十年、四十年のベテランですから、一発見ただけで、「お前何産つて言つたけど、うそだな」などと、どこののを混ぜたかなんてことはすぐわかる人でないとダメです。

中村 そうか、今のようにやぶきた一辺倒ぢゃないし、もつとうんと特色があつたんですね。

有渡山 僕ら昔の人間だもんだから、やぶきた一本じやおもしろくないよね。特色のあるお茶がなくなつちやつ

たよね。

谷 本 もう一つは製造の工程も関係ある

んですよ。今みんな機械でしょ。

だからみんな六十キロ、百二十キ

ロ、百五十キロっていうので、つ

まり工程がおんなんじになっちゃう
からおんなんじようなのがいっぱい
出てきちゃう。だからうま味がな

いわけ。生葉自体が買い葉なんて
いうのがたくさんあるから、富士
のやつも西のほうから買つてって
それを混ぜちゃうとかいうことに
なるから、もう恐らく特徴がない
んだろうね。

有渡山

昔は自園自製っていうのがたくさん
あって、そこのうちの特色があ
つたわけですよ。今は全部農協へ
出しちゃうでしょ。だからいい

お茶も、そう言つちや語弊がある
けど、悪いのもいつしょになっち
やう。本当の味つていうのはなく
なつちやただよね。

有渡山 僕ら買わないよ、あれは。

中 村 深蒸しは粉ばっかり出ちゃってね。

谷 本 粉が出ても急須が良けりやいいん

でしおけど、平たく言うとあれ
は都市の水が悪くなつたんですね。
だから悪い水でも味が出るという
ことで深蒸しっていうのがあると。
でも深蒸しに向く生葉と向かない
生葉があるわけでしょう。平たく
言や、葉肉が厚くてちょっと強い
やつのほうが深蒸しには向いてる
と。

有渡山 みんな深蒸しにしちゃうでしょ。
あんまり向かないのも深蒸しにし
ちゃうから、やたら粉ばっかりにな
つちやう。

有渡山

アウインさんが一番出したときに
でも深蒸しに向く生葉と向かない
生葉があるわけでしょう。平たく
言や、葉肉が厚くてちょっと強い
やつのほうが深蒸しには向いてる
と。

の取扱高っていうのはどのぐらい
の量になつてたんですか。

中 村 それを覚えてないんですよ。

谷 本 アウインさんのほうが多かつたと
思いますね。

有渡山 その扱い量が全部で何万ポンド、
何百万ポンド出たかはわからない
けど。

谷 本 アウインさんが一番出したときに
は。

有渡山 日本からの全輸出量の四十〜五十

%はアウインが出ましたです。

中 村 ほう、超大手ですね。そうなると。
有渡山 それで、その次がヘリヤさんだね。
谷 本 うちは大体三割ぐらいですよ。

有渡山

それはB A商会だとか、シーグフ
リードとかM J Bとか、それから
日本製茶とか、富士製茶とか、そ
ういうね。

谷 本 アウインさんが四十%でうちが三
十%、三十五%ぐらいのときもあ

りますけれども、先ほどのアウイン
りましたけど、いずれにしても。

中 村 さて、話またちよともとに戻り
ますけれども、先ほどのアウイン
が盛んに活躍していたころ、年間

戦争と茶輸出

有渡山 僕ら買わないよ、あれは。

中 村 深蒸しは粉ばっかり出ちゃってね。

谷 本 粉が出ても急須が良けりやいいん

でしおけど、平たく言うとあれ
は都市の水が悪くなつたんですね。
だから悪い水でも味が出るという
ことで深蒸しっていうのがあると。
でも深蒸しに向く生葉と向かない
生葉があるわけでしょう。平たく
言や、葉肉が厚くてちょっと強い
やつのほうが深蒸しには向いてる
と。

有渡山 みんな深蒸しにしちゃうでしょ。
あんまり向かないのも深蒸しにし
ちゃうから、やたら粉ばっかりにな
つちやう。

中 村 ほう、超大手ですね。そうなると。
有渡山 それで、その次がヘリヤさんだね。
谷 本 うちは大体三割ぐらいですよ。

有渡山

それはB A商会だとか、シーグフ
リードとかM J Bとか、それから
日本製茶とか、富士製茶とか、そ
ういうね。

谷 本 アウインさんが四十%でうちが三
十%、三十五%ぐらいのときもあ

りますけれども、先ほどのアウイン
りましたけど、いずれにしても。

中 村 それで、私の記憶で、アウインが

深蒸しなんていうのは邪道だよ、

谷 本 こう言つと怒られるでしょけど、
深蒸しなんていうのは邪道だよ、

さて、話またちよともとに戻り
ますけれども、先ほどのアウイン
が盛んに活躍していたころ、年間

外国茶商取扱高

(大正元・10年は『静岡県茶業史』P447~448、以降は『静岡県茶業史』続編P263~268より)

| | ホイットニー | アーウィン・ハリソンス アンド クロスフィールド | ヘリヤ | プール | メーシー | 全 体 量 |
|----------------|-----------------|--------------------------------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 大正元 (1912) | 封度 4,644,805 | — | 5,393,433 | 1,432,708 | 5,114,274 | 35,507,289 |
| 大正10 (1921) | 2,833,285 | 2,416,580 | 2,729,842 | 150,551 | 1,049,414 | 16,552,971 |
| 大正12 (1923) | 5,103,479 | 3,958,740 | 4,447,145 | 427,720 | 1,569,857 | 25,709,400 |
| 大正13 (1924) | | 6,436,907 | 4,446,886 | 375,272 | 1,504,282 | 22,342,128 |
| 昭和5 (1930) | | 8,291,140 | 3,715,634 | — | — | 22,543,553 |

いつもトップだったけど、一回へ
りやさんがトップのときがあった
んですよ。

いつごろですか、それは。

有渡山 谷本 昭和ですね。

和の十六年が戦争だからね。十二、
三年ごろかな。

中村 有渡山 僕が入ったのが昭和だからね。昭

和十六年七月の、確か二十四日
だと思う。土曜日の日ですけどね。
それが最後だった。

有渡山 中村 そうすると、今戦争ていうお話が

出ましたけれども、輸出としてお
茶を出していたのはいつまでだつ
たんですか。

有渡山 中村 輸出として出したのは、あれは昭
和十六年の七月の、確か二十四日
だと思う。土曜日の日ですけどね。
それが最後だった。

有渡山 中村 そのときアメリカで日本の資産の
凍結令が出た。確か二十四日の土
曜日だったと思うんですけどね。
そのとき、これは私ごとの話にな
るけれどもね。輸出の為替管理法
というのができて、その扱いが
税関でも銀行でも輸出商社でも全
然わかんないんです、出たばつか

で。為替管理法の申告書があるん
だけどね。それには銀行の証明を
もらうっていうわけですよ。それ

で朝、横浜の銀行にとんでいくつ
て承認もらってきたんで覚えている
んですよ。

谷本 第二次大戦といつても、つまりア
メリカと戦争する直前まで出して
たわけです。

有渡山 それでそのときも輸出の手続済ん
だだけれども、もう資産凍結にな
つたもんですから、ハワイあたり
まで行つてる船があつたですね、
お茶積んで。そういう船が全部そ
こから引き返しちゃつたです。だ
からその七月二十四日に通関した
けれども、実際には輸出できなか
った。アメリカまでは十日か十五
日ぐらいかかるかね、船で。

谷本 十五日はかかつたです。こっち側
の西海岸でもね。今と違いますか
らね。今は十日ぐらいで行きます
けどね。当時はもう十日以上。

有渡山 七月の五日か十日ぐらいの、その

以前でないと輸出はできなかつた
じゃないですかね。

中 村 ということは、そのいわば直前ぐ
らいまではかなりの量がずっと行
つてたみたいですね。清水から出
したんですよね。月に何回くらい
出荷ができたんですか。

有渡山 月に何回つて、もう船がアメリカ
向けの、大体アメリカが多かつた
からですね。一週間に一遍は、一
隻ぐらい入つてたと思う。

中 村 そんなにありましたですか。

アクメコード

有渡山 それはいろんな船があるからです
ね。日本の船も外国の船も入つて
きて。

中 村 向こうの本社とのいろんな連絡の
やりとりというのは、どういう方
法でやつてたなんですか。

有渡山 あれは電報ですね。

谷 本 それもほとんどクロフォードを使

中 村 谷 本

中 村 初めて見ました。

| | |
|-------|--------------------------|
| ZOJSH | Pan Fired |
| ZOJTI | Basket Fired |
| ZOJUJ | Natural Leaf |
| ZOJYN | Natural Leaf CUT |
| ZOJZO | TBT (Tea Ball Tea Cut) |
| ZOKAO | Pinhead Gunpowder |
| ZOKES | Gunpowder |
| ZOKIX | Imperial Gunpowder |
| ZOKJY | Black Guri |
| ZOKMA | African type Guri |
| ZOKOC | Yonkon type Gunpowders |
| ZOKOE | Yonkon type Chunmees |
| ZOKTH | Yonkon - Byproducts |

アクメコード

んです。これは値段から何から全
部入つてますから。

有渡山 これが標準じやないかね。

谷 本 これが標準。そのほかにプライベ
ートコードがあるわけ。

中 村 そつちはつまり暗号ですね。こつ
ちはどの会社も同じコード。

有渡山 これは全部標準なやつだから。各
会社が自分でもつてプライベート
コードっていうのを作つていた。

中 村 よく残つてましたね、こんなコ
ードブックが。

谷 本 いや、どこの商社もありますよ。
有渡山 そうだけど、よく残つたね。

谷 本 僕は押さえてた、それを。自分の
商売だったから。それでプライベ
ートコードではお客様の名前が全部
コードになつてるわけです。例え
ば見りやほとんどわかるけれども
五大湖周辺ですよ。これも。そ
でしょう。バルチモアとかベイシ
ティとかミシガンですね。ボスト
ン、ブルックリン、ニューヨーク
だ、これはね。こういうふうにこ

中 村 つまり具体的にはこの内容のこと。
谷 本 そうです。両方は持つてるわけで
す。これは商売に一番大切になる

うあるわけですよ。日本はプライベートコードで、これは会社の名前でしょ。やつもいつた

サラダなんかもどりにあるわけですよ。サラダフッズだ、ほら。あとね、サラダフッズはこれはモントリオールだ。ボストンにもありましたね。

有渡山 モントリオールが一番大きいじゃないですか。

谷本 MJBなんかもある、サンフラン

スシスコだ。MJBってどうのは、みんなコーヒーが紅茶かなと思

でしょ。これ緑茶の会社ですからね、もとは全部そですよ、こ

れ。もうひとつにあって、それ

で今度は結局、例えばケープルナンバー」、「arrived safely all well」とかね。つまり同じく買い付けに毎年来るわけですよ。お

ザレバのを打つわけだよ。P Wベリア、「arrive in at Haneda」とかね。何か日本語にすと書いてあって、ふらいぬそ

いうのを拾つて文章にしていく。

谷本 違う、これは値段が高いとか安いとかいう意味。

中村 これは内容を秘密にしておきたいといふことと、電報料の節約つて

そういうものもあるわけですか。

谷本 それもそうです。電報を毎日自転車で持つて、僕は油売つて怒られたことがあるんです。早く

行けとかいつてね。（笑）

有渡山 昔は本局が呉服町の今の東京屋のところにあつたんですよ。

谷本 僕は知らない、それ。

有渡山 それで、堀端のところへ越して、それから今のもへつた。だから僕らは電報を、それこそコード

の電報打ちに行くときなんかは、

本局は紺屋町のところにあつた。向

こう側の角が庵原屋っていうお菓子屋があつて、その向こうに金清軒がある。金清軒はまた駅のほうへ越したけどね。

中村 もとは別のところにあつた。

有渡山 小梳神社のね。小梳神社も位置変わっちゃつたけどね。小梳神社の

北側のとこに金清軒があつたんですよ。

中 村 それはともかく、そうするとこのアケメコードはどの業界でもこれを持つてたんですか。

谷 本 貿易屋はみんな持つてました。もう今はファックスの時代だからね。

でもね、今でも使うんですよ。なぜ便利かというと、コードとして使うんじやなくて、英文として使うわけですよ。非常におもしろい、よくできてる。これだけで学者やつてたのもいたもんな。

中 村 今はもうこれは全然。

谷 本 使いません。

中 村 本屋で売つてるなんていうこともないわけですね、これは。

谷 本 ないと思いますね、これは。有渡山 これは貴重なもんだね。

中 村 これ、何年版つていうのはどつかにあるわけですか。

谷 本 かなり使つてましたよ。何年ぐら

いまでかな。

中 村 インターネットの時代じゃちょっと

と考えられないですね。

有渡山 高等出たぐらいの人から、特別に多い人はいたけれどもね。年の多い人は五十五、六の人が多かつたですね。

谷 本 うん、そうです。だから毎日もう電報。

有渡山 あのコードにはアウイン商会は、クロスフィールド静岡となつてたね。

中 村 それがアウイン商会のコード。

有渡山 うん、会社の名前からはクロスフイールドはなくなつたけど、コードはクロスフィールド。

中 村 アルファベット順にずっと組み合わせてきて、それでうまく当てはめてるんですね。たとえば、XYで始まるのが何だかっていうふうには決めてある。

中 村 あと一つ、ちょっと確認しておきたいのは、女工さんがさつき二百五十人ほどいたつておっしゃいましたね。この女工さんは年齢とか出身地はどうだったですか。

有渡山 年齢は、昔、小学校卒業すると幾つだろう。

中 村 大体近在の人ですか。

谷 本 この近くですね。

谷 本 しかし、女工はほとんど棒とりだよな。

有渡山 うちの場合は袋詰めとかそういうのをやつてた。

中 村 それは会社の経営形態によつてもちょっと違つてことですね。

すね。

有渡山 高等出たぐらいの人から、特別に多い人はいたけれどもね。年の多い人は五十五、六の人が多かつたですね。

中 村 中心になつてたのは。

有渡山 中心は二十歳から若い衆だね。奥さんの人もいたけど、二十五、六の人が中心じゃないですかね。二十五、六から三十ぐらいの人ですね。いろんな分担に分かれているからね。

中 村 それでそれぞれ小さなグループになつて、袋詰めだと袋貼りだといろいろな仕事をしたわけですね。

有渡山 ええ、そうです。

中 村 大体近在の人ですか。

谷 本 この近くですね。

谷 本 しかし、女工はほとんど棒とりだよな。

有渡山 うちの場合は袋詰めとかそういうのをやつてた。

中 村 それは会社の経営形態によつてもちょっと違つてことですね。

谷本 だから、ヘリヤなんか九百人以上

でしたからね。

中村 そんなにいたんですか。

谷本 それは、いっぱい工場があつたでしょう。今の北番町一一七番地の一角と、それから若松町側のほうの農協になつてゐるのか何かになつていうあの辺一角は全部田んぼだつた。静商の校長をやつた朝比奈達朗のおじいさんの持ちもんだつた。そこにヘリヤが一九〇五年から六年に神戸、横浜をこつちへ合併したんだが、そのときには、工場と事務所をつくるというので、その田んぼを買つた。安倍川からトロッコで土砂を引いて、それで埋め立てしたわけですよ。

中村 有渡山 今お話をあつた、埋め立ててつく

有渡山

昔の復元地図を見ると、アウインがここですね。さつき私が言つたブール商会がここにあつたですよ。これがホイットニー、それからこかなか、アウイン・ハリソン・スクリューフィールドがあつたです、今伊藤園のとこ。あそこにあつたです

中村 有渡山 これはお茶の買い付けのためだつたんですか。

中村 そうですよ。

有渡山

この地図で見ると、全部アウイン・ハリソン・スホイットニー・商会ですけども、その一角という感じですね。

有渡山

一角です。ここはもとブールさんだけど、ここまで全部アウイン商会です。ここはふだんは石蔵を使つてたけども事務所はほとんど使つてなかつた。これあいてるもんだからここへソ連の通商代表部がはいつたんです。

がね。それでここのはうが大きくていもんだから、ここへ來た。

ブールさんとこに二階建ての石蔵があつて、奥に二階建ての事務所があつたです。戦前だけれども昭和八、九年ごろかな、ここへソ連の通商代表部が駐在したことがあつたんです。



Mr. Frederick Hellyer



Mr. Harold J. Hellyer



Mr. Arthur T. Hellyer



Mr. Walter Hellyer

FOUNDER AND PROMINENT FIGURES IN A PIONEER AMERICAN TEA FIRM IN JAPAN

ヘリヤ父子（オールアバウトイーより）

谷本 ここです。こっちからこうがトロ

ツコで運んだ所です。

有渡山

ここで紅茶をやつたことがあるんですよ。ヘリヤさんのは、道を隔ててて。

中村 その紅茶はどこ産ですか。

有渡山 日本だね。大谷でつくった茶です

よ。

谷本 実は今の大谷小学校の向かいの五百坪ぐらいのところに、ヘリヤの

大谷工場っていうのがあつたんです。

それは紅茶専門の工場でした。

中村 それはヘリヤで直営したんですね。

谷本 もちろんそうですよ。ヘリヤの場合には生葉を買って荒茶を作つて

というところからやつてましたの

で、人間が多かつたんでしうね。

細かいこと言いますと、ヘリヤつ

ていうのは慶應三年、一八六七年

ですね、長崎にフレデリック・ヘ

リヤとトーマス・ヘリヤというの

が來たわけです。なぜ來たかとい

うと、そのフレデリックとトーマ

スのおじさんにあたるウイリアム・

ウォールトというのが幕末当時長崎の出島で商館を經營して土佐藩と組んでたんです。あの有名なグラバーは薩長と組んだわけです。

茶屋になりますが、その当時は明治維新のころで、各藩軍備増強をやつてたので、船とか鉄砲とか、何をやつたかというと、後にはお

まあ平たく言うと、日本のお茶の輸出の一一番初め量的に出たのは、長崎の油屋町の大浦けいという女傑が見本を出して、それをウォールト、つまりフレデリック・ヘリヤのおじさんが一万斤発注したんですね、大浦けいに。一万斤というのは六千キロです。それが一番量的に出た初め、一八五六年です。

で今東大に来てるということです。その人に聞いてもいいと思います。文春に書いていますよ（『文芸春秋』一九九九年六月号「日本茶とアメリカ人」）。

まあ平たく言うと、日本のお茶

の輸出の一一番初め量的に出たのは、

長崎の油屋町の大浦けいという女

傑が見本を出して、それをウォー

ルト、つまりフレデリック・ヘリ

ヤのおじさんが一万斤発注したん

ですね、大浦けいに。一万斤とい

うのは六千キロです。それが一番

量的に出た初め、一八五六年です。

だけど、そのときにはまだそれ

だけの量を集めるのが大変だった

らしい、九州ではね。それだけは

まとまらなかつたということです

ね。フレデリック・ヘリヤは一七、

八歳のとき長崎に来て、そこで

現地妻のリエさんという日本女性

と結婚して女と男の子をつくつた

わけですよ。でも、それとは別に売り先のシカゴへ行つてボストン

で白人と結婚したんで、その系統
がずっと続いたわけですね。

中 村 じや重婚してるわけですね。
谷 本 そうです。そのフレデリック・ヘ

リヤの日本人妻と子供二人という
のは全然知らなかつたんだけれど、
四、五年前にひょんなところから

わかつて、娘さんのほうはミネさ
んというんですが、その人は日本

の牧師と結婚しましてね、星野さ
んという人。そこへフレデリック・
ヘリヤが死んだときにたくさん
遺産をミネさんにも残したんです
よ。それによつて教会が二つ東京
にできています。何でも金貨を八
畳間に並べても余るくらいたくさ
んくれたそうですから。そのミネ
さんと星野さんという牧師さんと
兄弟ですよ。星野直樹、それから
星野茂樹、星野芳樹と。

中 村 芳樹さんは『静岡新聞』に連載し
ていた人ですね。

谷 本 そうです。ヘリヤ商会のことを言

いますと、一九〇四、五年から一、

三年かけて神戸、横浜の店を閉め
て、そこにいた神戸と横浜の人間
を家族ともども静岡に集結させた
わけです。私の親は、このとき神
戸のヘリヤについてこつちへ来た
人間です。

中 村 お父さんのお名前何でおっしゃい
ましたつけ。

谷 本 勇次郎。これは、ずっと一年じゅ
う神戸の店におりましたフレデリ
ックの子供のハウスコックをやつ
ていたんです。三人おりまして、
それは白人ですよ。上からアーサ
ー・ヘリヤ、通常日本ではヘーテ・
ヘリヤと呼んでました。それから
ウォルター・ヘリヤ、それからハ
ロルド・ヘリヤ。このハロルド・
ヘリヤが神戸に一年じゅういたん
です、家族ともども。うちの親父
は、ここでハウスコックをやって
たんです。それで親父とおふくろ

田さんね。藤田さんは日本駐在の
静岡のヘリヤの総元締みたいな人
で、秘書みたいなことをやつてた
んだね。このコードブックつくつ
たの全部藤田さんですから。奥さ
んは芸者だったな。覚えてるんだ、
おれは。(笑)しまいには安東小
学校の近くに住んでいた。あの奥
さんおもしろい人でね。長火鉢が
こうあつて、芸者さんのときから
煙管でタバコ吸つててね、僕ら子
供のときに行くと火鉢のふちでパ
カンつてやつて、よく来たなんて
言つてお茶菓子みたいなのがいつも
持たせてくれましたけどね。藤田
さんという人はいい人だつたね。
それから、事務方のお偉いさんは
横浜から来た山上さんだな。山上
重克さんのお父さん。

有渡山

谷 本 僕はあの人にはかわいがられたつ
けや。

田さんね。藤田さんは日本駐在の
静岡のヘリヤの総元締みたいな人
で、秘書みたいなことをやつてた
んだね。このコードブックつくつ
たの全部藤田さんですから。奥さ
んは芸者だったな。覚えてるんだ、
おれは。(笑)しまいには安東小
学校の近くに住んでいた。あの奥
さんおもしろい人でね。長火鉢が
こうあつて、芸者さんのときから
煙管でタバコ吸つててね、僕ら子
供のときに行くと火鉢のふちでパ
カンつてやつて、よく来たなんて
言つてお茶菓子みたいなのがいつも
持たせてくれましたけどね。藤田
さんという人はいい人だつたね。
それから、事務方のお偉いさんは
横浜から来た山上さんだな。山上
重克さんのお父さん。

来てたね。つまり飲み過ぎて神経

みんなやられちゃった。（笑）だ

つて、昔はのんびりしててね。大

体一、二番茶が終わるともう毎日

暮ですよ。夜は二丁町ですよ。み

んなしょってくるわけだ、病気を。

ヘリヤさんが小遣いやつて、早く

医者行つて直せとか言つて。（笑）

いい時代だった。

有渡山 山上さんのお父さんといえば、う

ちの兄貴がヘリヤにいたでしよう。

その弟が来たつていうことで、そ

でかわいがつてくれたんです

谷本 でもおつかない人だつたらしいよ。
中村 ところで、さつきでてきた「日本

茶とアメリカ人」を書いたロバーツ・ヘリヤさんは誰の子になるん

でしようか。

谷本 それ多分。ハロルド・ヘリヤの孫

中村 だと思うよ。

先ほど谷本さんがおっしゃったヘ

リヤさんのこととか、星野三兄弟の話つていうのは、何か活字にな

谷本

星野さんの後裔が星野家の歴史を書いたんですよ。それを読んで初めてわかったんですよ。その中にヘリヤの系図とか星野家の系図とか全部ありますから。驚くなかれ、うそかほんとか知らないけど、そ

の系図を見ると、ヘリヤさんはフレデリック・ヘリヤ、トーマス・

ヘリヤの兄弟は何と一八人。

谷本 兄弟が。

中村 兄弟が。

谷本 兄弟姉妹が。（笑）

中村 困っちゃうね、それじゃ。

谷本 それで彼等は、ボーッマスから來

たんだよ、そのフレデリックとトーマスは。

中村 イギリスのボーッマスですか。

谷本 イングランドだよ。その親父何やつてたか。その本には彫刻家つ

て書いてあるんだよ。ところがよく

中村 ああ二番目の人ですね。

谷本 そうですね。エイティさんはいつ死んだつけ。アーサー・ヘリヤ

は。

有渡山 アーサーは戦後じやないの。

谷本 結局ウォーターサンが来て、その

あとウォーターサンの子供のフレデリックさんというのが最後のヘリ

つたものがあるんですか。

い。おもしろいよ。ヘリヤは商売やつた人とか、大使館にもいたし、ロバートの系統は大体学者になつてゐる。いっぱい後裔がいるわけでしょう。ロバートは日本語うまい

からね。ハロルドさんは病弱で、僕らはとつくの昔に知らないんだけれども、三十代でスイスに行つて死んだね。

谷本 さきほどのフレデリックの子供の三兄弟というのは、三人とも静岡にいたんですか。

中村 いや、常駐はしてません。例えば、

谷本 戦後昭和二十四年に貿易が再開になりましたよね。そのときにはウ

ォルターが來たんです。

中村 ああ二番目の人ですね。

谷本 そうですね。エイティさんはいつ死んだつけ。アーサー・ヘリヤ

ヤですよ。

有渡山

僕ら知つてゐる人はフレデリック・ヘリヤさんといつて、あれはジュニアだね。太つた人だつた。

谷本 フレデリックの子供がやつぱりフ

レデリック・ジュニア。

中村 それはアーサー、ウォーターハロルドのどれですか。

谷本 いや、そのほかにもいたわけです。

中村 まだいたわけですか。もうわからなくなつてきました。

有渡山 戰前、僕ら知つてゐる人はフレデリ

ック・ヘリヤさん。フレッドさん、フレッドさんといつて。

中村 そうするとアーサーさんたちとのいわば兄弟には兄弟なんですね。

谷本 ごめんなさい、違います。アーサーさんの子供だよ、フレデリック・ヘリヤは。

中村 エイティの子供。

谷本 うん、だと思います。

中村 それがジュニア。

谷本 フレッド、フレッドって言つてた。有渡山 太つた人だよ、その人はね。

中村 この人が静岡によく来たんですね。

有渡山

僕らが知つてゐるときはもうその人だけだつた。後からジョージつていう人が來たつけ。いとこだかつて言つたつけかな。だけどその人はそう長くいなかつたけどね、フレデリックさんは戦争が始まつた八月の始めに亡くなつたよね。事務所で。

中村 フレッドさんは静岡で亡くなつた、それが昭和十六年ですね。

有渡山 そうそう、凍結令が出て一週間か十日くらいたつてから亡くなつたんです。八月の初めだつたよね。

中村 その間に亡くなつた人とか、資産のこととか、そういうものに対する賠償を大蔵省からもらいました。それは湯浅坂本法律事務所つて、今百人ぐらいいると思うけど、有名な国際間の弁護をやるところに頼んだんです。僕は静岡に帰つたばかりだもんで、三十年ぐらいのときやつてたからよく覚えてるんです。

に着いて廃棄処分になつたらしいですね。あるいは没収になつたかもしれない。それから戦後の昭和二十四年に敵産管理が外れて、全部アメリカ側のヘリヤに返還になつたわけですね。静岡の方の会社の資産などは、全部敵産管理で管理されちゃつたわけなんだけど、それが戦後に解除になつたので、

その間に亡くなつた人とか、資産のこととか、そういうものに対する賠償を大蔵省からもらいました。それは湯浅坂本法律事務所つて、今百人ぐらいいると思うけど、有名な国際間の弁護をやるところに頼んだんです。僕は静岡に帰つたばかりだもんで、三十年ぐらいのときやつてたからよく覚えてるんです。

ともかく、ヘリヤさんが何で金を残したかよく知らない。結局輸出がだめになつたのは平たくいうと、戦後農地解放になつて農家が豊かになり、農産物価格が上がつ

た。それ自体は富の平均化で僕は大変結構だと思うけど、そういうことで世界の価格に比べてお茶がめちゃくちゃ高くなつてしまつた。だから輸出はだめになつちやつた

ということです。

じつは戦前、五大湖周辺では、

紅茶よりも緑茶のほうがアメリカの白人が先に飲んでたんだ。

中 村 そうらしいですね。

谷 本 ちょっと話がとんでも申しわけないけど、結局ケニアなんかも、茶園のエスティートができたのは、第二次大戦のとき日本軍がインドの近くまで来たので、紅茶産地が危うくなつたとイギリスが考えたからだね。イギリス人というのは用心深い。だから全部ケニアの植民地からとれるようにということでケニアへたくさん茶園をつくつたわけです。

中 村 知らない間に大分時間も経ちました。そろそろ終わりにしたいのですが、ここでちょっと確認してお

きたいことがあります。静岡の一番茶は、まず外商が全部おさえてから出回つたというお話なんですが、実際にそのとおりだったんですか。つまりふつうのお茶も市場に出回る前に輸出業者がます押さえてしまつという。

谷 本

普通のお茶とおっしゃるけど、戦前、戦後の三十年ぐらいまでは、平たく言や輸出主導ですよ。いいですか。今のお茶屋さんは戦後この五十年やつと日本茶の商売というものが成り立つようになつた話なんですよ。

有渡山

輸出関係が仕入れをやつてる間は、内地商の人は手が出ないわけですよ。値が上がる。だから、いいお茶は全部、輸出業者に高い値で買われちゃうもんだから。

谷 本

戦後のことといえば、昭和二十七、八年から三十年ぐらいまでは、北アフリカ市場がなかなか盛んだつたわけですよ。これはフランスミッションとやつたんですが、いか

に日本がちょろかつたかということが雑誌記事になつています。これは一般には全然知られていないことだと思いますよ。

中 村 何に載つてたんですか。

谷 本 『彷書月刊』という特殊な雑誌の連載記事ですけれども。書かれたのは大崎正二という元大蔵商事にいた方です。この中には当時いかに日本人がごまかせるかつていうことが書いてあります。それは戦後北アフリカ向けのグリがものすごく忙しくなつた時のことです。自分が一社独占して北アフリカをやるんだという男が現れてね、それにだまされて契約したことによつて、みんなこの青野さんとか、青野さんはK B Kと静岡茶業と日本茶業、結果として全部つぶされることになつちやつたんです。そのときに大量のお茶を集めなければならなくなり、今までのやり方では集まらないもんだから、今の茶市場を作つたんですよ。

中 村 そのお話はまた別の機会にうかがうことにして、とりあえず、こう

いう理解でいいでしょうか。つまり今の蒸し製の高級煎茶というか、いわゆる商品としていい値段で取引されるお茶は、基本的には輸出向けだつたんだと。これは言い過ぎですか。

谷 本 それほどでもないとは思うけれども、平たく言うと、一番出たのは

大正七年（一九一八）ですよね。三万トン以上も出たわけですよね。

そのときの日本の全生産量は三万七千八百トンですから。ということは、ほとんど輸出ということですよ。

有渡山 そうだね、僕ら子供の時分のことだ。

中 村 私は、正式の生産統計に載らない、

いわゆる地方の番茶とか、ごくごく狭い地域市場でだけ動いてるお茶というのはまだ相当たくさんあつたと思っていますが、高い商品価値のあるお茶というのは、実質

的にはほとんど外国に売られていましたということですね。

谷 本 今と大変違うのは、ともかく一、二番茶はほとんど輸出されたということなんですよ。

有渡山 そうだね。輸出茶は戦後になつてから二番も三番も混ぜるようになつたけどね。

中 村 今の市場の動向を見ていくと一番茶は早いほどいいですね。輸出茶についてもそういうことがやっぱりあつたんですね。

谷 本 ありましたよ。だからね、例えばアウインとかヘリヤが買い付けに入ると、内地はもう全然入れない。

だからそこんところで相場がとまつちまうわけですよ。今で言うと、

市場に某大手が入りやもうだめだというようなもんですね。だから輸出主導ですから、アウイン、ヘリヤばっかりじゃない、富士製茶さんもあるし、それから戦後は

北アフリカ何とかあつたな、北阿貿易っていうのをつくって、それ

中 村 静岡以外の茶産地、例えば狭山とか伊勢のほうのお茶の扱いつついどうのはどうだつたんでしょうか。

やつぱり向こうにそういう外商がいたんですけど。

谷 本 いや、こっちへ運ばれて来ちゃつたわけです。平たくいうと、神戸から出たのは宇治の茶とか奈良の茶、あるいは九州とか四国とか、そういうもんが神戸から出たんです。だから三重以東はもともと横浜です。横浜のほうは神戸より早いですからね、開港が。

中 村 ということは、横浜から出ていたものが今度は逆にそつくり静岡経由の清水になつちやつたわけですね。

谷 本 そうですね。それがちょうど百年ぐらい、今年で百年になるわけですよ。ところで、アウインさんは清水までの輸送は青木ですか。

有渡山

青木運送です。

でやつたようなこともありましたね。

主要港の製茶輸出量

(寺本益英『戦前期日本茶業史研究』P123より)

(単位:トン)

| 年 次 | 横 浜 | 清 水 | 四 日 市 | 神 戸 |
|-------------|--------|--------|-------|-------|
| 1896(明治29)年 | 12,508 | — | — | 6,850 |
| 1897(〃30) | 12,198 | — | — | 7,596 |
| 1898(〃31) | 11,769 | — | — | 6,344 |
| 1899(〃32) | 12,114 | — | — | 6,445 |
| 1900(〃33) | 11,469 | 95 | — | 5,685 |
| 1901(〃34) | 10,845 | 93 | — | 5,491 |
| 1902(〃35) | 11,141 | 239 | — | 6,733 |
| 1903(〃36) | 13,433 | 323 | — | 7,035 |
| 1904(〃37) | 12,588 | — | 257 | 6,456 |
| 1905(〃38) | 9,818 | — | 428 | 4,907 |
| 1906(〃39) | 7,908 | 2,352 | 386 | — |
| 1907(〃40) | 7,574 | 3,365 | 427 | 4,149 |
| 1908(〃41) | 5,828 | 4,783 | 687 | 3,022 |
| 1909(〃42) | 6,175 | 6,588 | 704 | 2,840 |
| 1910(〃43) | 5,587 | 8,803 | 911 | 2,332 |
| 1911(〃44) | 4,089 | 10,593 | 488 | 2,555 |
| 1912(大正元) | 3,879 | 9,338 | 694 | 2,195 |
| 1913(〃2) | 2,734 | 8,366 | 861 | 1,439 |
| 1914(〃3) | 2,551 | 10,280 | 1,106 | 1,370 |
| 1915(〃4) | 2,830 | 12,440 | 1,061 | 1,500 |
| 1916(〃5) | 3,455 | 12,955 | 1,050 | 1,347 |
| 1917(〃6) | 2,388 | 14,822 | 1,527 | 471 |
| 1918(〃7) | 2,343 | 14,935 | 1,501 | — |
| 1919(〃8) | 824 | 10,839 | 947 | — |
| 1920(〃9) | 809 | 8,942 | 598 | — |
| 1921(〃10) | 927 | 6,098 | 483 | — |
| 1922(〃11) | 636 | 10,877 | 780 | — |
| 1923(〃12) | 602 | 10,413 | 643 | 3 |
| 1924(〃13) | 53 | 9,800 | 279 | 2 |
| 1925(〃14) | 349 | 10,834 | 164 | 53 |
| 1926(昭和元) | 407 | 9,582 | — | 182 |
| 1927(〃2) | 328 | 9,499 | — | — |
| 1928(〃3) | 303 | 10,490 | — | — |
| 1929(〃4) | 282 | 10,084 | — | — |
| 1930(〃5) | 63 | 10,162 | — | — |
| 1931(〃6) | 401 | 10,653 | — | 1 |
| 1932(〃7) | 424 | 11,592 | 5 | 111 |
| 1933(〃8) | 533 | 13,380 | 44 | 213 |

谷 本

うちちは鈴与なんです。だから僕ら割合大きい顔してるのは、こんな

小ちゃんぼになつても、青木さん

にしても鈴与さんにとって、お茶

屋で大きくなつたということだか

ら、先代の鈴木与平さんなんかは、

一ヶ月に一遍は必ず挨拶に来たも

ん。出荷なんかは鈴与の人間が四

六時中常駐してましたから。どこ

中 村

の茶商のところへも、例えばアウ
インなら青木さんの所の人が二、
三人来ていた。それでトラックの
手配とかしたんです、毎日出るわ
けですから。

そうすると、清水までの輸送はト
ラックで、鈴与さんなら鈴与さん
の系列の会社がやつてたということ
ですか。

谷 本

そのとおりです。鈴与自動車だつ
て始まりはそれですから。

中 村

お話を聞いて、また静岡のお茶の
貿易のすごさっていうのを再認識
しましたね。

有渡山

貿易の盛んなときは静岡うんと景
気良かつた。(笑)

谷 本

景気はよかつた。すごいよ、ほん
とにこれは。

有渡山 お茶に関連する茶箱とか印刷屋さん、それから工場なんかも、それに紙の問屋さんとかもね。

だつたんです。



7代目鈴木与平氏とウォルターヘリヤ氏 昭和34年

谷 本 今の話はトラック運送のことだけど、一番始めは大八車。

有渡山 北街道を馬力を使って行つたね。

谷 本 そうだね、馬力だね。

有渡山 僕が入ったときにはもうトラック

谷 本 割合早い時期から自動車で運ぶようになつたんですね。それから

もとの鷹匠町の停留所からこっちに来ていた静鉄電車は、ここが終点でしたよね。もとはお茶を運ぶのも目的だつたんだけれども、これはほとんどあんまり利用してないんだよね。

有渡山 できても、鷹匠町、今の新静岡ね、

あそこから軽便で向こう行つたですよ。その時分は荷物出ただけどね。ここまで電車が来てからあまり利用しなかつただね。

谷 本 でもあの電車は便利だつたね。僕ら乗つたけどさ、あのチンチン電車は。

中 村 私も小さいころよく乗りましたよ。いやいや、今日はどうもありがとうございました。大変おもしろかったです。本当にありがとうございました。

静岡で活躍した

外国茶商の記録

一 茶輸出の開始と清水港からの直輸出

日本が鎖国を解き、アメリカを始めとする欧米諸国との貿易を開始したのは、一八五八年のことである。駿河の商人のなかには、貿易開始をまたず、いち早く開港場となる神奈川に店を開き、その日に備えたものもあった。工業未発達の日本の輸出品としては、生糸について茶が第二位を占めた。静岡県における茶の生産量もあがり、輸出を目当てに旧幕臣による牧の原の開拓が進められたことはよく知られている。また、こうした流れのなかで、製茶技術の先進地であつた宇治や朝宮、土山などからの技術導入も進み、やがて静岡独自のデングリ製法が発明される。静岡県は、茶の生産量でも、製茶技術の上でも日本一の地位を築いていくのだが、製品を外国に送り出すためには、どうしても横浜港に運ばなければならなかった。初期にはほとんどの茶荷物が最寄りの港から沿岸行路の輸送船で、それでも帆船だったが、横浜まで運ばれた。やがて明治三二年（一八八九）、東海道線が開通すると、茶荷物の大部分が汽車によつて運ばれるよ

うになり、海上輸送業者は大打撃をうけ、江戸時代以来、日本の物資輸送の地域拠点であった遠州灘から駿河湾にかけての港はたちまち衰退に追い込まれた。ちなみに、明治二三年に県下各地から海上輸送によつて横浜に運ばれた茶は、一千四万七千二百四十八斤であつたのが、翌二四年には、一挙に一〇八万五千一百斤に激減している（『静岡県茶業史』四二三頁）。しかし、茶輸出港としての横浜の独占的地位は揺るがなかつた。したがつて、茶荷物は依然として横浜に運ばなければならず、静岡県内の茶業関係者にとつて、最寄りの清水港から直接外国に茶を輸出する許可を得ることが悲願であり、熱心な運動が行われた。

その結果、明治三二年（一八九九）に開港場の指定を受けることができたが、茶を外国に送り出すためには、再製といつて火入れを行ふ必要がある。しかし大規模な再製工場はすべて横浜に集中しているため、どうしても茶は横浜に送らねばならない。そこで、海野孝三郎らが中心となつて明治三八年に再製工場を静岡に誘致し、いっぽう清水（現清水市）の有志は日本郵船株式会社と交渉した結果、明治三九年（一九〇六）五月一三日、同社の神奈川丸が清水に寄港して、初めて清水港からの茶直輸出が行われた（同書四三七頁）。

その後、清水港からの茶輸出量は飛躍的に増大し、文字通り日本一の茶輸出港になる。静岡の茶市場に集まつた茶を輸出向けに清水まで運ぶには、荷車が使用されていたのが、やがて清水・静岡間に軽便鉄道が敷設され便利になつた。これが現在の新清水・新静岡間を結んでいる静岡鉄道の前身であり、あの「ちやつきりぶし」が作られる背景となる。

一 日本茶を扱つた外国茶商たち

それでは、日本さらにいえば静岡を中心に茶を買い集め、外国に輸出したのはどんな商人であつたるうか。こゝにようやく今回の座談会の趣旨につながるテーマとなる。『静岡県茶業史』（四四五）四四六頁）に掲載されている明治期に活躍した外国茶商の一部をつぎに紹介しておこう。こうした外国茶商はそれぞれ自ら静岡市に滞在したり、支配人を駐在させて大量の茶を買い付けたのである。

· Hunt. Co. · ハント商会 北番町

維新前、長崎において製茶輸出業を始め、維新後横浜に移り、明治四五年に静岡市に移転した。

· John. C. Siegfried. Co. · シーグフリード商会 安西

最初、ブランデン・スタイン商会と合同經營であつたが、後に分離して神戸に創立し、明治三五年に静岡市に支店を設置した。

· J. C. Whitney. Co. · ホイットニー商会 安西

明治四四年四月、静岡市に出張所を開設。それ以前から直接英國から買付けに来ていた。

· Gottliebe. Co. · ゴットリープ商会 安西一丁目

明治三九年静岡市にゴットリープ水谷商会出張所を開設。同四一年に出張所を廃し、同四二年に安西一丁目にゴットリープ商会静岡出張所を開設。

· J. H. Peterson. Co. · ピーターソン商会 安西

本店はシカゴ。明治四〇年に静岡市に出張所を開設。

· Cater. Macy. Co. · カーター・マーシー商会 安西一丁目

明治三〇年横浜に創業し、大正元年静岡市に支店を開設。
· Irwin. Harisons. Crosfield. Inc. · アーヴィン・ハリソン・クロスフィールド商会 安西

三 ユーカースが会つた静岡の外国茶商

一九三五年に刊行されて以来、世界の茶に関する文字通りの百科全書として揺るぎない地位を占めている名著がある。W. H. ユーカースによる "All about Tea" である。著書は最初、"All about Coffee" を刊行して高い評価を得ており、その続編として茶に関する本を執筆することにした。その取材のため、ユーカースは大正一三年（一九二四）に来日、五月五日に横浜に上陸してから精力的に全国を歩いた。日本側も茶の普及に役立つとみて特別予算を組んで便宜をはかった。彼は五月一一日に静岡市到着、翌日新聞記者会見を行ひ、その後市内の輸出茶商のもとを訪れた。翌日は浮月楼にて知事も加わった懇談会が開かれ、彼は日本茶の宣伝不足を指摘した。この会にはマッケンジー夫妻、ヘリヤなど外商の多くも加わった。宴席では芸妓の手踊り「茶摘みの面影」などが披露された（「ちやつきりぶし」ができていたら、真先に演じられただろう）。ユーカースは、日本茶業の発展を期待する演説のなかで、家康の「人の一生は重荷を背負つて歩む」としの一節を引用して満場を感嘆させたところ。翌日から金谷、牧の原、久能、清水港などを訪ねて一六日に三重県に向かい近畿地方を歴訪、二四日には神戸港から台湾に

ALL ABOUT TEA

*To my friend Seichi Ishii
in grateful appreciation of
his kind assistance in
my Japanese researches
for "All about Tea"*

William N. Ekery

Feb. 18, 1937

ユーカースのサイン

夫人同伴で来日し、静岡にも来たが、そのとき「私は日本が大好きなので、自ら松之助、妻は富士子と名乗ることにした」と、大サービスであった。

ちなみに、ユーカース一家には著者ユーカースから自筆サイン本が贈られ、この歴史的な一冊は現在、谷本勇氏が所蔵している。

に静岡市内を案内したのが石井富士雄氏の父君である戻氏であり、同家には著者ユーカースから自筆サイン本が贈られ、この歴史的な一冊は現在、谷本勇氏が所蔵している。

さて、ユーカースは日本各地で歓迎された成果を、その著書の中にはもちろん詳しい。今回の話題に関わる二つの外国茶商については静岡茶業がいちばん詳しい。今回の話題に関する二つの外国茶商について、"All about Tea"(Vol. II, 224~227)から引用してみよう。

Arwin, Harrisons, Whitney.

アーウィン・ハリソン・ホイットニー商会の静岡支店は日本茶の単独輸出業者の中でも最も大きい。この会社はJ·C·ホイットニーハリヤー(アーヴィング)・A·グロー氏により一九〇六年に設立)の支店およびアーウィン・ハリソン・クロスフイルド会社(R·F·アーウィンとA·P·アーウィンにより一九一四年に設立)を引き継いだものである。グロー氏は、シカゴ・ホイットニ

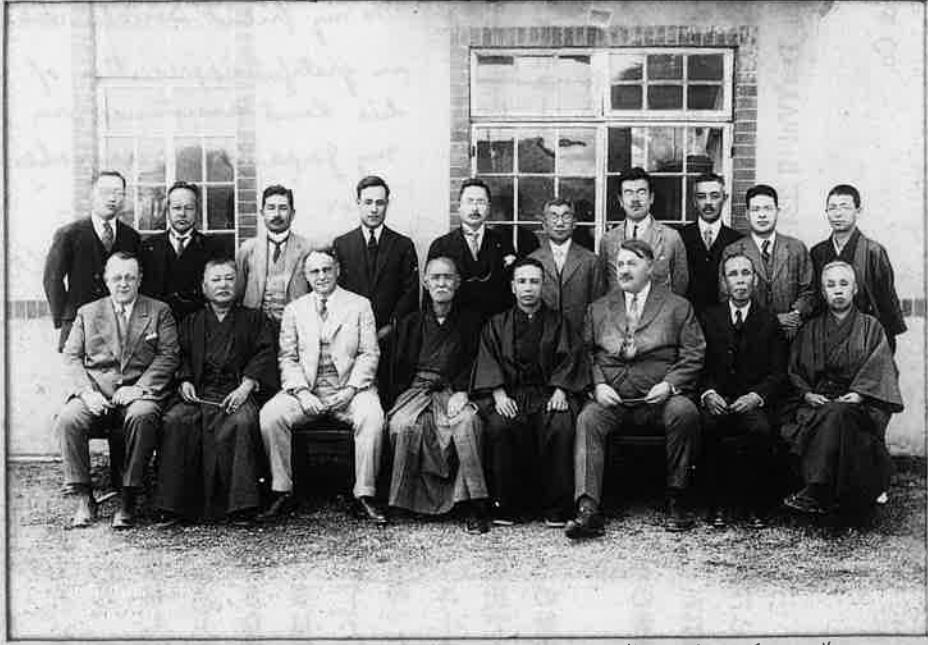
行き、六月四日下関に帰着、五日に静岡に一泊して東京に戻り、八日に横浜から帰国した。ユーカースは翌年六月、今度は夫人同伴で来日し、静岡にも来たが、そのとき「私は日本が大好きなので、自ら松之助、妻は富士子と名乗ることにした」と、大サービスであった。

ちなみに、ユーカース一家には著者ユーカースから自筆サイン本が贈られ、この歴史的な一冊は現在、谷本勇氏が所蔵している。

Hellyer & Co.

故フレデリック・ヘリヤ氏は、毎年日本を訪れる外国人茶商の間で長きにわたって指導者であった。彼は一八四九年にイングランドに生まれ、初めて日本に来たのは一八六七年である。そして、おじ

のハント氏の会社に加わった。ハント氏は一八五六年創立のオルト商会(現在長崎市にあるグラバー公園にその建物が保存されている)の社長であった。しかし、一八六九年、オルト商会は仕事をやめ、あらたにハント・ヘリヤ商会を設立した。この会社はヘリヤ商会に引き継がれ、一八七四年まで続いた。ヘリヤ商会はフレデリック・ヘリヤ氏と彼の兄弟であるトマス・ヘリヤ氏によって構成されている。彼らは神戸で茶輸出に従事しており、横浜にも支店を開いていた。フレデリック・ヘリヤ氏は一八八八年にアメリカに渡り、シカゴに支店を開き、そこが現在の本社となっている。さらに、一八九九年、静岡に別の支店を開設した。神戸と横浜の事務所は一九一七年に閉鎖した。フレデリック・ヘリヤ氏は一九一五年に亡くなつた。外國茶商の中でもっとも古くから生き残ってきたこの会社の業務は、シカゴのアーサーとウォルター・ヘリヤ両氏、そして静岡のハロルド・ヘリヤ氏に引き継がれた。ハロルド氏は一九一五年の後半に亡くなり、アーサー氏があとを継いだ。なお、アーサー・ヘリヤ氏は販路拡張特別委員会の委員である。



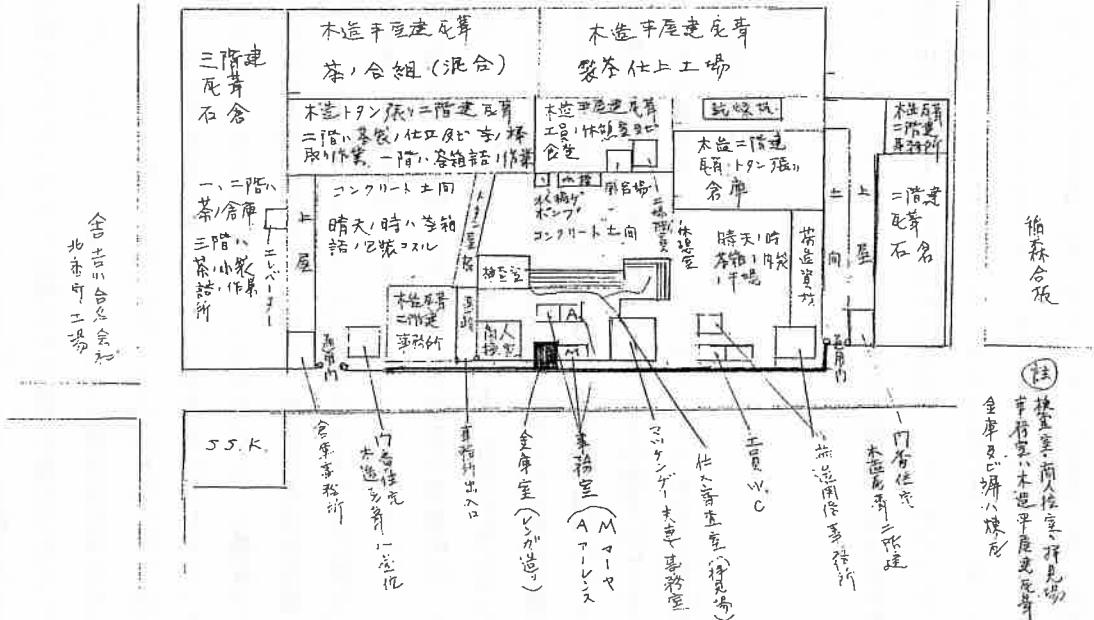
KAWAFUKU KIZU HIRAYAMADA ISHII MITSUHASHI MIYAMOTO MORI KATO SAIGO MASUDA
W.H.SIEGPRIED MATSUURA A.T.HELLIER OSAKI NAKAMURA GOTTLIEB HARASAKI FUSIE
MAY 10TH. 1926

SUGIMOTO PHOTO STUDIO

大正十五年庚

日本綠茶販路擴張運動聯合特別委員會

静岡市北番町
アーチン、ハリソン、ホットニー商会の
概略圖ざいりきずが正確せいかつではない
仓库、工場、事務室等の坪數は記憶きおくにありまじん



有渡山重二さん作成

一社の支配人の一人で、一九一三年以前のある時期まで毎年日本に来ていた。その間、J・F・オグリビー氏が会社に加わるようになり、グロー氏は日本に行くのをやめてオグリビー氏が日本における仕事を引き継いだ。グロー氏は日本茶の販売促進活動に積極的な興味を示し、一九二五年に組織された第一回販路拡張特別委員会の委員であつた。彼は合併後のアーウィン・ハリソン・ホイットニー商会の社長代理となつた。一九二九年、彼は引退しシカゴに住んでいる。

一九一四年以後、アーウィン・ハリソン・クロスフイールド会社は、静岡の買い付け事務所を整備し、一九一八年にR・F・アーウィン氏が現会社の第一人者となり、日本に来て五年間滞在して支店の業務の再編を行つた。

J・C・ホイットニー会社とアーウィン・ハリソン・クロスフイールド会社という二つの会社は一九二四年五月に合併し、現在のアーウィン・ハリソン・ホイットニー商会となつた。J・F・オグリビー氏、D・J・マッケンジー氏、ポール・D・アーレン氏が日本でのバイヤーになつてゐる。オグリビー氏は一九二五年にオハイオ州コロンバスに引退し既に亡くなつてゐる。マッケンジー・アーレン両氏は、一九二六年以来、販路拡張特別委員会のメンバーである。

四 日本茶輸出に貢献した外国茶商

昭和十年六月二日、日本茶の特販委員会の創立十周年の記念式典が清水港の県水産試験場で挙行され、貿易功労者が表彰された。その中には大谷嘉兵衛、江原素六らとともに、フレデリック・ヘリヤ

ら静岡で活躍中の外商の多くが含まれていた。その中から、アーウィン・ハリソン・ホイットニー商会に対する、日本製茶販路拡張連合特別委員会委員長・中村円一郎の謝辞の一部を紹介しておく（『日本茶業史』続編 二〇九～二一〇頁）。

（前略）貴商會は一九二四年三月創業以来、米加（アメリカとカナダ）両国を始め、ソヴィエト連邦、北部アフリカ等への日本茶輸出に尽瘁し、殊に代表者ディー・ジー・マッケンジー氏は本委員会委員の一人として終始一貫対外宣伝に献身的努力を傾倒し、以て本委員会の使命に一段の光輝を加えらる、洵（まこと）に欽仰の至りなり、ここに本委員会創始十周年を迎ふるあたり記念品を贈呈して深甚の謝意を表す（原文カタカナ）

これに対してもマッケンジー氏は、「如何にせば日本茶は改良され得るか」という主題を掲げ、私欲・スピード・粗雑といった誘惑から離れて本当の改良を進めたいものだと述べた。

ここで、もうひとつ紹介しておきたいのは、相良町の平田寺境内にある英文の石碑のことである。平田寺は聖武天皇の宸筆を藏する古刹で、本堂に向かつて右側にこの石碑が建つていて、碑文の末尾には、SHIZUOKA SEPTEMBER 27TH 1915 HELLYER & CO.である。内容は、長年にわたつて相良から川根筋にかけて優れた茶を生産してきた殿岡幸次郎、山本長右衛門、優秀な茶師を育て自らも高品質の茶を作つてきた今村茂平、戸塚豊蔵に対する感謝の気持ちを述べたもので、彼らに贈られた感謝状の文面を殿岡らが中心になつて石碑に刻んだものである（参考・河原崎次郎編著『郷土茶業史 覚書』相良町教育委員会、一六一頁）。

ここまで外商関係の資料を列挙してきたが、いずれも断片的なものは、まことに遺憾なことである。日本における資料を探索するだけなく、広く海外の英文資料の研究も行う必要がある。戦前の日本貿易の大きな柱であった輸出茶の実態を明らかにすることは、日本近代史研究にも大きく貢献するだろう。

それはさておき、すでにお気づきのことと思うが、昭和一〇年以降の外商に関する資料や外商毎の茶取り扱い量の統計は『静岡県茶業史』第三編にも掲載されていない。もちろん日本が戦争の時代に入つたことと関係ある。したがつて、今回の座談会の内容を具体的に裏付けるには、当時の文書記録や書簡などをこまめに探し出して再構成するしかないだろう。逆にいえば、座談会の内容は、必ずしも正確な記録ではないものの、昭和一〇年代における静岡における外国茶商のありかたを知る上で、貴重な資料になると考えられる。

なお、静岡の茶貿易に関する貴重な体験記に、明治二八年生まれの大石鶴一郎氏が書かれた『貿易茶物語』（私家版）がある。また、時代的には本座談会で扱つた時代よりかなり前で終わっているが、大正七年に刊行された『茶業の静岡市』が参考になる。

その他、『日本茶貿易概観』（茶業組合中央会議所、一九三五年）、『日本茶輸出百年史』（日本茶輸出組合、一九五九年）、森竹敬浩『世界に静岡茶売った男』（静岡新聞、一九九三年）、寺本益英『戦前期日本茶業史研究』（有斐閣、一九九九年）なども参照されたい。

注 ソビエト市場の開拓

ソビエトはロシア革命（一九一七年）以前から、イギリスに次ぐ世界第二の喫茶国だったが、国土が寒冷で茶樹の栽培に適していなため、消費する年間七万トンの茶は輸入に頼っていた。

革命後の混乱がおさまると、国交の回復につとめ茶の輸入を再開したが、相当の供給不足の状態であった。その頃日本が緑茶の生産国であることを知ったソビエトは、ウラジオストックの国営ティートラストから、上海のアーウィン・ハリソン・キング商会を通じて、買いつけできないかを問い合わせをしてきた。これは新しい販路の開拓を求めていた日本にとっても、願つてもない好機であった。数回にわたる交渉の末、一九二四（大正一三）年、静岡県の緑茶一〇〇〇箱、およそ二七トンを横浜港から上海に向けて試験的に出荷したのが、ソビエトへ茶の輸出の始まりである。その後、日本から輸出された緑茶が、中国製の緑茶に混せて飲まれているということがわかり、さらなる市場進出のためには、中国緑茶の形状に合わせ、揉捻を十分ほどこし、よく捲き込んだ緑茶がよいということになった。静岡県茶業組合聯合会はさつそく中国から実物をとりよせて開発を進め、一九二五（大正一四）年中に、形が球形で凹凸があり、グリグリした茶（「グリ茶」とよばれた）の製法を、生産者に広く普及させたのであつた。この茶が後に公募によって命名された「玉緑茶」である。

この間、日本茶の製造に貴重な指導と助言をあたえたのが、ソビエトの中央購買組合の上海支部の次席技師であったフョードル・エミリエウイッチ・シェーニングであった。一九二九（昭和四）年日本茶検査の任務をおびて来日した彼は、紅茶製造の指導とともに、静岡県下を視察してグリ茶についても次のような行き届いた助言を与えている。

・日本茶の製造工程をみると、茶そのものに苦労をかけ過ぎるという感じがする。工程個々についていえば、蒸しが十分でないこと、揉捻が足りないことは、さしつけ改めたい。これは粗揉を軽くして、第一回目の揉捻を行い、軽度の再乾燥後第二回の揉捻を行つたら、なお免れよう。また紅茶製造の場合と同じく、揉捻後生葉の篩分けを行つたらどんなものか。再製についてもほぼ同様な感がある。

・清水港から送りだす荷造りは頗る見事だが、何故機械力をもつて箱詰めと荷造りを行わないか。これにはダビッドソン式がよからう。

・日本茶の品質は何分にも雑駁である。しかし年々向上し、改善されてきたようだ。日本茶には最初、需要者の習慣上やや好ましからざる香味があつたようだ。おそらくこれは気候。風土からくる特色であろうが、今日では需要者も慣れてきたので、あえて好ましからぬ香味を除去する必要もあるまい。

・日本茶の水色・香味はまず申し分ないが、不揃いで、木茎の多い形状がどうにも感心できない。色沢は今少し黄緑色であること望むが、それは蒸製では無理かもしれない。しかしそこにも何か研究の余地があるであろう。

・日本茶は、ようやくその銘柄で売れるようになった。今日露国が茶の注文を支那から日本に変えたのは、露支国交の関係や、ソビエトの政策もあるが、第一に支那茶は値段ばかり高くなつて、品質が粗悪に流れている。いかに改善を要求しても、少しもその実は挙がらない。その上支那には統一された茶業組合がないというようなことが主たる理由である。もし日本も売れるにまかせて品質を落とすようなことがあると、支那茶の二の舞を演ずることになるかもしれない。

こうした貴重な助言をふまえ、日本の茶業者は品質の向上に努力を重ねた。たまたま、ソ連經營の鉄道が満州国に譲渡されることになり、その代替物資として日本茶が指定された。その結果、一九三五年から三七年にかけて大量に茶が輸出され、一九三七年には、一一三万ポンドを越えた。しかし、翌年になると、買い付け量はごく僅かとなり、それを境に日本茶の対ソ連輸出は途絶した。その背景には、第二次世界大戦に至る国際情勢があつたことは言うまでもない。（『日本茶輸出百年史』一六〇—一七一頁より抜粋）

明治年代以降(1868~1999)における輸出数量・金額(その1)

| 西暦 | | 緑茶(t) | 紅茶他(t) | 合計 | |
|------|-------|--------|--------|--------|--------|
| | | | | 数量(t) | 金額(千円) |
| 1868 | 明治元年 | 6,069 | 0 | 6,069 | 3,582 |
| 1869 | 明治2年 | 5,157 | 0 | 5,157 | 2,102 |
| 1870 | 明治3年 | 7,389 | 0 | 7,389 | 4,512 |
| 1871 | 明治4年 | 8,440 | 0 | 8,440 | 4,672 |
| 1872 | 明治5年 | 8,841 | 0 | 8,841 | 4,226 |
| 1873 | 明治6年 | 8,004 | 0 | 8,004 | 4,659 |
| 1874 | 明治7年 | 11,477 | 0 | 11,477 | 7,253 |
| 1875 | 明治8年 | 12,767 | 0 | 12,767 | 6,863 |
| 1876 | 明治9年 | 12,136 | 0 | 12,136 | 5,454 |
| 1877 | 明治10年 | 12,431 | 0 | 12,431 | 4,375 |
| 1878 | 明治11年 | 13,055 | 0 | 13,055 | 4,284 |
| 1879 | 明治12年 | 17,161 | 0 | 17,161 | 7,446 |
| 1880 | 明治13年 | 18,197 | 0 | 18,197 | 7,498 |
| 1881 | 明治14年 | 17,318 | 0 | 17,318 | 7,022 |
| 1882 | 明治15年 | 16,981 | 0 | 16,981 | 7,030 |
| 1883 | 明治16年 | 16,697 | 19 | 16,716 | 6,106 |
| 1884 | 明治17年 | 16,100 | 13 | 16,113 | 5,820 |
| 1885 | 明治18年 | 18,540 | 20 | 18,560 | 6,584 |
| 1886 | 明治19年 | 21,393 | 25 | 21,418 | 7,723 |
| 1887 | 明治20年 | 21,295 | 72 | 21,367 | 7,603 |
| 1888 | 明治21年 | 19,860 | 41 | 19,901 | 6,125 |
| 1889 | 明治22年 | 19,324 | 78 | 19,402 | 6,157 |
| 1890 | 明治23年 | 22,295 | 55 | 22,350 | 6,327 |
| 1891 | 明治24年 | 23,876 | 79 | 23,955 | 7,033 |
| 1892 | 明治25年 | 22,478 | 33 | 22,511 | 7,525 |
| 1893 | 明治26年 | 21,844 | 22 | 21,866 | 7,702 |
| 1894 | 明治27年 | 22,434 | 92 | 22,526 | 7,930 |
| 1895 | 明治28年 | 23,193 | 103 | 23,296 | 8,879 |
| 1896 | 明治29年 | 19,759 | 185 | 19,944 | 6,372 |
| 1897 | 明治30年 | 19,527 | 53 | 19,580 | 7,860 |
| 1898 | 明治31年 | 18,429 | 67 | 18,496 | 8,216 |
| 1899 | 明治32年 | 20,192 | 647 | 20,839 | 8,499 |
| 1900 | 明治33年 | 18,357 | 987 | 19,344 | 9,036 |
| 1901 | 明治34年 | 18,394 | 1,555 | 19,949 | 8,854 |
| 1902 | 明治35年 | 18,633 | 1,022 | 19,655 | 10,484 |
| 1903 | 明治36年 | 21,228 | 480 | 21,708 | 13,935 |
| 1904 | 明治37年 | 21,017 | 351 | 21,368 | 12,834 |
| 1905 | 明治38年 | 17,109 | 384 | 17,493 | 10,584 |
| 1906 | 明治39年 | 17,041 | 372 | 17,413 | 10,767 |
| 1907 | 明治40年 | 17,729 | 681 | 18,410 | 12,618 |
| 1908 | 明治41年 | 15,496 | 502 | 15,998 | 11,153 |
| 1909 | 明治42年 | 17,773 | 672 | 18,445 | 13,157 |
| 1910 | 明治43年 | 18,557 | 1,211 | 19,768 | 14,542 |
| 1911 | 明治44年 | 19,011 | 301 | 19,312 | 14,379 |
| 1912 | 大正元年 | 17,686 | 210 | 17,896 | 13,463 |

明治年代以降(1868~1999)における輸出数量・金額(その2)

| 西暦 | | 緑茶(t) | 紅茶他(t) | 合計 | |
|------|-------|--------|--------|--------|-----------|
| | | | | 数量(t) | 金額(千円) |
| 1913 | 大正2年 | 15,065 | 247 | 15,312 | 10,076 |
| 1914 | 大正3年 | 16,813 | 957 | 17,770 | 12,710 |
| 1915 | 大正4年 | 18,475 | 1,918 | 20,393 | 15,402 |
| 1916 | 大正5年 | 19,309 | 3,697 | 23,006 | 16,082 |
| 1917 | 大正6年 | 19,961 | 10,141 | 30,102 | 21,756 |
| 1918 | 大正7年 | 20,854 | 2,289 | 23,143 | 23,056 |
| 1919 | 大正8年 | 13,366 | 555 | 13,921 | 18,402 |
| 1920 | 大正9年 | 11,534 | 363 | 11,897 | 17,113 |
| 1921 | 大正10年 | 7,092 | 46 | 7,138 | 7,719 |
| 1922 | 大正11年 | 13,114 | 3 | 13,117 | 17,829 |
| 1923 | 大正12年 | 12,274 | 38 | 12,312 | 16,014 |
| 1924 | 大正13年 | 10,799 | 17 | 10,816 | 12,783 |
| 1925 | 大正14年 | 12,549 | 70 | 12,619 | 14,763 |
| 1926 | 昭和元年 | 10,260 | 524 | 10,784 | 12,110 |
| 1927 | 昭和2年 | 10,222 | 348 | 10,570 | 10,896 |
| 1928 | 昭和3年 | 10,634 | 168 | 10,802 | 11,834 |
| 1929 | 昭和4年 | 10,503 | 228 | 10,731 | 12,011 |
| 1930 | 昭和5年 | 8,999 | 216 | 9,215 | 8,387 |
| 1931 | 昭和6年 | 10,992 | 534 | 11,526 | 8,232 |
| 1932 | 昭和7年 | 12,806 | 590 | 13,396 | 8,172 |
| 1933 | 昭和8年 | 12,954 | 419 | 13,373 | 8,449 |
| 1934 | 昭和9年 | 13,078 | 1,332 | 14,410 | 9,557 |
| 1935 | 昭和10年 | 14,183 | 2,698 | 16,881 | 11,419 |
| 1936 | 昭和11年 | 12,207 | 4,188 | 16,395 | 13,130 |
| 1937 | 昭和12年 | 17,462 | 7,118 | 24,580 | 23,181 |
| 1938 | 昭和13年 | 12,162 | 4,639 | 16,801 | 12,063 |
| 1939 | 昭和14年 | 16,146 | 7,330 | 23,476 | 23,463 |
| 1940 | 昭和15年 | 11,640 | 4,669 | 16,309 | 24,593 |
| 1941 | 昭和16年 | 8,717 | 3,580 | 12,297 | 21,272 |
| 1942 | 昭和17年 | 3,393 | 1,764 | 5,157 | 9,078 |
| 1943 | 昭和18年 | 6,625 | 1,803 | 8,428 | 17,269 |
| 1944 | 昭和19年 | 5,823 | 1,619 | 7,442 | 20,738 |
| 1945 | 昭和20年 | 1,133 | 402 | 1,535 | 7,926 |
| 1946 | 昭和21年 | 3,284 | 87 | 3,371 | 188,015 |
| 1947 | 昭和22年 | 2,703 | 345 | 3,048 | 295,965 |
| 1948 | 昭和23年 | 3,980 | 50 | 4,030 | 736,473 |
| 1949 | 昭和24年 | 7,279 | 1 | 7,280 | 2,012,806 |
| 1950 | 昭和25年 | 6,630 | 602 | 7,232 | 1,813,357 |
| 1951 | 昭和26年 | 8,493 | 434 | 8,927 | 2,146,674 |
| 1952 | 昭和27年 | 9,709 | 123 | 9,832 | 2,530,343 |
| 1953 | 昭和28年 | 12,305 | 936 | 13,241 | 3,158,783 |
| 1954 | 昭和29年 | 11,569 | 5,609 | 17,178 | 4,879,190 |
| 1955 | 昭和30年 | 9,270 | 5,224 | 14,494 | 3,509,846 |
| 1956 | 昭和31年 | 7,832 | 2,410 | 10,242 | 2,035,035 |
| 1957 | 昭和32年 | 7,541 | 3,506 | 11,047 | 2,156,131 |

明治年代以降(1868~1999)における輸出数量・金額(その3)

| 西暦 | | 緑茶(t) | 紅茶他(t) | 合計 | |
|------|-------|-------|--------|--------|-----------|
| | | | | 数量(t) | 金額(千円) |
| 1958 | 昭和33年 | 6,067 | 1,490 | 7,557 | 1,645,366 |
| 1959 | 昭和34年 | 6,498 | 1,531 | 8,029 | 1,600,930 |
| 1960 | 昭和35年 | 8,509 | 1,608 | 10,117 | 2,028,830 |
| 1961 | 昭和36年 | 6,327 | 1,673 | 8,000 | 1,694,770 |
| 1962 | 昭和37年 | 7,660 | 929 | 8,589 | 1,894,780 |
| 1963 | 昭和38年 | 3,433 | 251 | 3,684 | 958,610 |
| 1964 | 昭和39年 | 3,345 | 79 | 3,424 | 792,050 |
| 1965 | 昭和40年 | 4,599 | 135 | 4,734 | 1,053,000 |
| 1966 | 昭和41年 | 1,883 | 73 | 1,956 | 442,450 |
| 1967 | 昭和42年 | 1,711 | 81 | 1,792 | 456,270 |
| 1968 | 昭和43年 | 1,928 | 105 | 2,033 | 490,990 |
| 1969 | 昭和44年 | 1,637 | 27 | 1,664 | 487,760 |
| 1970 | 昭和45年 | 1,531 | 38 | 1,569 | 442,650 |
| 1971 | 昭和46年 | 1,447 | 48 | 1,495 | 455,200 |
| 1972 | 昭和47年 | 1,872 | 40 | 1,912 | 405,830 |
| 1973 | 昭和48年 | 2,150 | 170 | 2,320 | 403,800 |
| 1974 | 昭和49年 | 1,821 | 653 | 2,474 | 406,640 |
| 1975 | 昭和50年 | 2,198 | 672 | 2,870 | 477,150 |
| 1976 | 昭和51年 | 3,225 | 16 | 3,241 | 629,970 |
| 1977 | 昭和52年 | 3,480 | 114 | 3,594 | 838,210 |
| 1978 | 昭和53年 | 3,376 | 211 | 3,587 | 629,400 |
| 1979 | 昭和54年 | 3,051 | 35 | 3,086 | 590,800 |
| 1980 | 昭和55年 | 2,669 | 30 | 2,699 | 599,960 |
| 1981 | 昭和56年 | 2,673 | 35 | 2,708 | 680,000 |
| 1982 | 昭和57年 | 2,443 | 32 | 2,475 | 685,080 |
| 1983 | 昭和58年 | 2,080 | 44 | 2,124 | 559,170 |
| 1984 | 昭和59年 | 2,731 | 56 | 2,787 | 803,650 |
| 1985 | 昭和60年 | 1,762 | 44 | 1,806 | 611,770 |
| 1986 | 昭和61年 | 1,210 | 50 | 1,260 | 488,240 |
| 1987 | 昭和62年 | 1,046 | 60 | 1,106 | 381,490 |
| 1988 | 昭和63年 | 1,230 | 30 | 1,260 | 424,320 |
| 1989 | 平成元年 | 635 | 36 | 671 | 391,073 |
| 1990 | 平成2年 | 283 | 39 | 322 | 433,496 |
| 1991 | 平成3年 | 253 | 36 | 289 | 491,984 |
| 1992 | 平成4年 | 257 | 33 | 290 | 491,727 |
| 1993 | 平成5年 | 305 | 22 | 327 | 553,842 |
| 1994 | 平成6年 | 311 | 33 | 344 | 561,558 |
| 1995 | 平成7年 | 461 | 32 | 493 | 730,425 |
| 1996 | 平成8年 | 428 | 68 | 496 | 937,909 |
| 1997 | 平成9年 | 499 | 81 | 580 | 984,629 |
| 1998 | 平成10年 | 652 | 100 | 752 | 1,235,617 |
| 1999 | 平成11年 | 755 | 73 | 828 | 1,351,654 |

明治元年から昭和33年まで『日本茶輸出百年史』P528~529より(数量は斤をtに換算)

昭和34年以降は大蔵省通関統計より

あとがき

ふれわが遅くなりましたが、座談会記録の第二集を刊行することができました。貴重なお話を聞かせてくださいた有渡山さんと谷本さんにはあらためて御礼申し上げます。

といひて、「ちゃつくりぶし」を話題にした第一集の六頁に、志郎さんから提供していただいた茶摘み姿の芸者衆の写真を載せましたが、これがじつは"All about Tea" (Vol. II P221) に掲載される写真と同じのやうに気がつきました。それには、"Local Color at Sizuoka, some charming Geisha pose as Tea Girls" と解説がついています。外人さんにも、本物の茶摘み娘ではないことが分かっていたのです。この本は世界中に行き渡っていますから、被写体となっている芸者さんたちも演じ甲斐があつたと思います。

編集委員

静岡茶商工業協同組合
静岡市茶流通業史編集委員会

| | |
|------|--------|
| 委員長 | 山梨 宏之 |
| 副委員長 | 加納 昌彦 |
| 指導 | 中村 羊一郎 |
| 副理事長 | 望月 浩 |
| 委員 | 牧野 直 |
| 委員 | 小島 康平 |
| 委員 | 谷本 宏太郎 |

(静岡県民俗学会代表理事)

添付の昭和十六年頃の静岡市安西付近の地図は、二村悟様が聴き取り調査等をもとに制作したものです。
お気づきの点がございましたら、静岡茶商工業協同組合までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

静岡で活躍した外国茶商のこと

発行日 平成十二年十二月四日

発行 静岡茶商工業協同組合

〒420-0005 静岡市北番町81

TEL(054)271・1955

FAX(054)254・5054

編集 静岡市茶流通業史編集委員会

印刷 日本レーベル印刷株式会社

表紙写真

蘭字茶箱（駿府博物館所蔵）



本物が恋しくなったら
静岡茶